

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Traditional Material Culture of the Mongols Explanatory Notes and a Translation of “Mongol of the Mongolian People's Republic”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 九祚 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004547">https://doi.org/10.15021/00004547</a>

## モンゴル人民共和国の伝統的物質文化

——ビャトキナ著『モンゴル人民共和国のモンゴル人』から——

加 藤 九 祚\*

I. 解説	移動手段
II. モンゴルの伝統的物質文化	家内的な獣毛製品と皮革の加工
著者はしがき	住居
農牧業	衣服
狩猟	飲食物

### I. 解説

ビャトキナ *Вяткина, Капитолина Васильевна* (1892–1972?) の本論文 *МОНГОЛЫ МОНГОЛЬСКОЙ НАРОДНОЙ РЕСПУБЛИКИ* は、ソ連科学アカデミー『民族学研究所紀要』(新シリーズ, 第40巻)の一部として1960年に発表された。

ビャトキナはトムスクの生れ、長年、ソ連科学アカデミー民族学研究所のレニングラード支部に属し、代表的モンゴル学者として、民族学研究所編のシリーズ『世界の民族』*Народы Мира* の一冊『シベリアの諸民族』(1956年)の「ブリヤト」の項、『東アジアの諸民族』(1965年)の「モンゴル人民共和国の諸民族」の項および「中華人民共和国のモンゴル人」をも執筆している。また長年にわたるブリヤト研究を総括した著作『ブリヤトの文化と生活』*Очерки культуры и быта бурят* をはじめとして、約40篇の論文がある。

ここで、ビャトキナに至るまでの、ロシアにおけるモンゴル民族学の研究について一言してみよう。ここでは、ブリヤトについては、モンゴル人の一部ではあるがこれをのぞき、モンゴル人民共和国の領域に限ろうと思う。

ハルハ・モンゴルが清朝に征服されたのは1688年のことであるが、それまでもジュンガリアのトルグト族問題などをめぐってロシアと清国との紛争は絶えなかった。1691年、ドロンノールの会議において、ハルハの清国藩属が公式に調印されると、モンゴル人は清国人の圧迫をのがれてロシア領に移住しはじめた。清の雍正帝はこれを阻

\* 国立民族学博物館第4研究部

止する方策の一つとして、ロシア政府に向かって、逃亡モンゴル人のロシア定住を認めず、そのもとの牧地に追い返すよう要請した。清国との親善関係を破りたくないロシア政府は、1730年には1,443人、1731年には689人、1733年には754人の額魯特人を強制的に清国へ追い返した。しかしロシア政府のモンゴル政策はときとともに変化し、1763年には、時のセレンギンスクの司令官ヤコビーに密令を發し、モンゴル人のロシアへの遁入を妨げないよう、しかし中国側の抗議を避けるためモンゴル人をシベリアの奥地に追いやることを命じた [サヴィン 1930: 67-70]。

一方、17世紀以後19世紀後半にいたるまで、ロシアと中国の通商関係は、もっぱらモンゴルを經由して行われた。キャラバンも、ロシアの使節も、ロシアの北京駐在宣教師団もモンゴルを横断して北京におもむいた。したがって、モンゴルに関する情報は、中国事情と同じ程度にロシア政府の一部に知られるようになった。

例えば1715年-1717年、ピョートル一世の命によって清国に派遣された使節団員のひとり、ロレンツ・ラングの日記にはつぎのような記述がみえる。「10月7日、われわれはセレンギンスクを出発、9日にサラチンに着いた。この地のシベリアとモンゴリアの間の両側に歩哨が立っていた。サラチンからの道は高い山と溪谷を通っていた。15日、われわれはトラ川に近づいた。ここから、有名な長城まで広がる、一木もない大ステップを横断しなければならなかった。薪の代わりに乾いた馬糞を燃やし、水の代わりに、ステップにかなりよく降る雪を解かした。馬肉を食べた。はるか東方へ広がるこのステップが、冬期これほどの寒気につつまれるとは想像することもできない。私にとっては、シベリアの冬の方が、この地よりもずっとおだやかに思われた。ステップではひどく寒いので、毛皮のユルタ以外の住居はない。ユルタの中央では乾燥した糞を燃やすが、燃える前に煙って、慣れないものはこれで暖をとるよりも外に出て凍えることをよしとするほどである。

タタリア [モンゴリア] の住民は馬、ラクダ、羊、雌牛、雄牛を豊かに所有している。3,000~4,000頭の馬、600~700頭のラクダを所有しないものは、ひどく貧しいと考えられている。彼らの生活については、つぎのこと以外にはとりたてて言うこともない。すなわち、彼らはユルタに住み、死んだ馬、雄牛その他の動物の肉を食べるということである。神官 [ラマ] は新鮮な肉だけを食べる。この国には鳥獣が多く、とりわけガン、特別の種類の雷鳥、シカ、ヤギなどが豊富である。したがって住民たちはわるい食物を食べなくてもすむはずである。彼らがわるい食物を食べるのは、大神官たるフトゥフトゥ [活仏] の命によるものである。神官は、ふつうの人をして彼らを神としてあがめるようにしむけた。人々は、フトゥフトゥが坐ったり、立ったりし

た場所に接吻させてもらうことを幸せと考え、恩恵であるとしている。地上の一切の生きものはフトゥフトゥに依存している。したがって住民たちはどんな生きものも、たとえヘビ、イナゴ、コオロギのたぐいでも殺してはならない、との教えを守っている。この戒律は主として、聖職者とそのとりまきによって守られている。フトゥフトゥの上に、さらにダライ・ラマがいる。これは不死とされているものである……」  
[ラング 1978: 492-493]。

ラングは当時のダライ・ラマが7歳ほどであるが、30回目の生れ変わりであること、さまざまな仏像があることを記述している。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、ロシア人の商人はキャフタやクーロン（今のウランバートル）だけでなく、コブド、ウリヤスタイにも常時滞在していた。

1889年、ロシアのシベリア学者ヤドリントツェフはオルホン川流域、むかしのカラコルムおよびハラ・バルガスの近くで、突厥のビルゲ・カガンとキュル・テギンの紀行碑を発見した。ついで1892-1896年にはロシアのチュルク学者ラドロフの指導のもとにこの碑文が刊行され、デンマークの学者トムセンとラドロフによって、1893年同時に解読された。

19世紀後半にはプルジェワルスキー、ポターニン、ポズドニエーフらの探検家・学者がモンゴルを現地踏査して民族学的著作を発表するが、そのうちポターニンの『西北蒙古誌』（1881-1883）、ポズドニエーフの『モンゴリアとモンゴル人』（1896-1898）はモンゴルの民族学的研究の画期的労作とされている。この両書とも一部が邦訳されている。またウラジミルツォフの『蒙古社会制度史』（1934）はモンゴル史研究に重要な役割を果たした。

日本では、第二次世界大戦の前からモンゴルへの関心がわりあい強く、ヨーロッパ人（ロシア人を含む）や中国人による古典的モンゴル研究書もかなり訳され、また日本人研究者によるすぐれたモンゴル研究もかなりある（これについては、山田信夫『日本に於ける蒙古・中央アジア研究小史』[1970]参照）。例えば、内モンゴルの牧畜文化を研究した梅棹忠夫のいくつかの論文は精細をきわめたもので、今日でもその価値を失っていないと考えられる[梅棹 1950, 1951, 1955a, 1955b]。江上波夫、泉靖一、磯野富士子らの業績も見逃せない。しかしこれらの多くは、第二次世界大戦終結までの時代的条件に制約されて、内モンゴルのモンゴル人を対象としている。

最近では、逆にモンゴル人民共和国（いわゆる外モンゴル）に関する書物が現われている。このうち、モンゴル科学アカデミー総裁 B. シレンデブ著、松田忠徳訳『資本主義を飛び越えて』、吉田実著『モンゴル発見』の両書はいずれも現代モンゴルに

関するハンドブック的な内容で、便利である。田中克彦、小沢重男、伊藤幸一、蓮見治雄らの仕事も注目に価する。

モンゴル人民共和国は面積 1,565,000 km<sup>2</sup>、国全体が平均海拔 1,580 m の高原に位置している。人口は1,555,000人（1978年1月1日現在）。国民の民族別構成は、1969年1月10日の国勢調査によれば、ハルハが901,200人で総人口の75.3%を占め、つぎにモンゴル語を話す他のグループ、すなわちデルベト（34,700人）、バイト（バヤド）（25,500人）、ザハチン（15,000人）、オリョト（6,900人）、トルグート（7,100人）が多数を占めるが、これらの人々は主として国の西部に住んでいる。国の北部にはモンゴル語を話すブリヤト（29,800人）、北西部にチュルク語を話すカザフ（62,800人）、トゥーバ（15,700人）および少数のホトンが住む。このほか、ロシア系22,100人、中国系その他56,200人が主として人口の集中している地域に住んでいる。

モンゴル人民共和国では今日急速に定住化がすすんでいるが、なお1967年現在で農業人口の約63.1%、つまり454,000人が遊牧的牧畜を営んでいたことが報告されている。

モンゴル高原で遊牧的牧畜が支配的になったのは前10世紀頃で、今日までにすでに3,000年が経過している。そしてモンゴルにおける封建制の確立は12世紀末から13世紀初頭のことであり、1921年の革命まで実に700年存続した。またラマ教がモンゴルにおける支配的宗教として広まったのは16世紀後半のことで、約400年間つづいた。清朝による支配は17世紀末から20世紀初頭まで200年あまりであった。以上三つの要素がモンゴル人の生活に深い影響を及ぼしたことは否めない事実である。

モンゴルに遊牧的牧畜がかくも長期にわたって主たる生産方法であった理由はなんであろうか。この疑問にたいして、今日までのところ「自然条件のせいである」との答えが圧倒的であった。最近モンゴルの学者ジャグワラル Н. Жагварал は自然的・気候的要素と社会・経済的要素との総体であるとしてつぎのように書いている。「遊牧的生活様式が存在を自然的条件によってのみ説明することはできない。なぜならこの説明によっては、自然条件が根本的に変化しない限り定着への移行の可能性を否定することになるからである。また社会・経済的諸関係によるだけでも説明できない。封建制の撤廃とともに、遊牧的方法が自動的になくなるわけでもないからである」。

モンゴルの自然的・気候的条件は多様であるが、牧民たちは遠い昔から三つの地帯に分けた。すなわち、ハンガイ、ステップ、ゴビの3地帯である。このうち、牧畜にとって最も好都合なのは、北部のハンガイ地帯で、国土の30%以上を占めている。ここには高山性、山地ステップ性およびステップ性の牧草地が広がり、水場も少なくな

い。したがってこの地は羊、牛、馬の放牧に適し、また限定された規模ではあるが、農耕や草刈りも可能であった。

ゴビ地帯は、ハンガイ地帯に比べて、牧畜のための条件が劣るとされてきた。民衆の中には、「ゴビで人間に生れるよりも、ハンガイで牛に生れた方がましだ」という言葉があるといわれる。ゴビ地帯は国土の約30～40%、主として南部および南西部の半砂漠および砂漠地域、さらに大湖の周辺がこれに含まれる。この地帯の特徴は、丈の低いまばらな半砂漠的植物、ハンガイに比べると、ずっと暖かい、乾燥した気候、それに開かれた水場と森林のないこととされている。しかしこの地の牧草は丈が低くまばらであるけれども、滋養に富んでいる。例えばモンゴル語でタアナまたはホムウルとよばれるノビルはあらゆる動物にとって、脂肪分になるとされている。そのほかゴビ地帯には家畜に必要な各種の岩塩が多い。それはハンガイよりもはるかに豊富である。ゴビ地帯はとくにラクダと羊の飼養に好都合である。

いわゆるステップ地帯はハンガイとゴビの中間にあり、高い山や森林がなく、開かれた水場も少ない。乾燥したステップ地帯であり、ハンガイ地帯には劣るが、馬、羊の飼養には十分に適している。

こうした自然を舞台にして、モンゴルの人々は遠い昔から遊牧的生活を営んできたのである。そしてモンゴルの遊牧的牧畜は、馬と羊を主な家畜とし、フェルトのユルタを主要な住居とする内陸アジア型を特徴としていると言える。ソ連の民族学者ワインシュテインによれば、世界には遊牧的牧畜経済を基盤にした、いくつかの経済・文化的タイプがあることを指摘している。そのうち、一つは西アジアおよび北アフリカに広まっているもので、アラブによって代表される。もう一つは主としてユーラシアの乾燥地帯に広まるチュルク・モンゴル型であるとしている [ワインシュテイン 1973:1-2]。

### モンゴル人の定住化の問題

モンゴル人民共和国のモンゴル人は現在、過去数千年来はじめての大変革の過程にある。つまり、遊牧民の定住化である。

モンゴル学者マイスキーの計算によると、1918-1919年当時、モンゴルの都市住民(定住民)は約14万であった。当時の総人口を647,000人として、21.6%を占めた。これは総人口の約5分の1であるからかなりの割合を占めるが、しかしその内訳をみると、ほとんどがモンゴル人以外の民族で占められていた。マイスキーによれば、中国人が85,000人、ロシア人5,000人で、モンゴル人は50,000人であった。このモンゴ

ル人の定住民はなにものであったか。実は50,000人のうち40,000人は寺院に定住していたラマであった（このうち約20,000人は首都ウルガの大寺院、残りの20,000人は全国にちらばっていた）。当時最も大きなラマ寺院は、ダ・フレ（ラマ数13,000人）、ガンダン（7,000人）、ザイン・フレ（3,000人）、ワンギーン・フレ（2,000人）、エルデニ・ズー（1,500人）、ジャルハンザ・フレ（1,500人）、デジリン・フレ（1,200人）などで、残りの寺院のラマ数は100～300人、少ないところで20～30人であった。

当時のラマの総数は、マイルスキーによると約115,000人（男子の総人口の約40%）で、寺院に住む約40,000人以外のラマは世俗の中で家族を持ち、生業を営みながら、年間約4回、大祭日や祈禱のために寺院に詣でていた。1921年の革命初期、モンゴルには大小約800のラマ寺院があった [グライヴォロンスキー 1979: 58]。

現在、モンゴルの牧民の生活は遊牧的形態から半遊牧的、半定住的形態に移行しつつある。この場合、それぞれの形態は現代モンゴルの条件においていかなる状態をさすのか。グライヴォロンスキーによるとつぎの通りである。

まず遊牧的形態は、1ないし2家族からなる牧民が家畜とともに、年間少なくとも4～6度牧地を変え、同じ宿営地に1～2カ月以上とどまることなく、しかも冬の牧地に住居を所有しない状態をさす。同じ宿営地にとどまる期間はさまざまな要素によって異なるが、放牧家畜の種類、数、季節、牧草の状態、水や塩の状態、働く牧民の数、牧民の経験と熟練度、社会的所有にたいする意識の水準などに依存している。羊の牧民が一カ所に滞留する期間は、ふつう夏・秋の場合で5～7日間、冬・春で1～3カ月間ぐらいである。

半遊牧とは、1年の大部分を主として遊牧的生活を送り、最も条件の悪い冬・春期に一カ所に3～4カ月間滞留できる可能性をもったものをさす。これらの牧民の場合には冬または春の牧地に、小さな組立式住居をすでに所有している。

半定住とは、年間の宿営地変更が2～3度以内、したがって1年の大部分を定住して暮すものをさす。こうした経営に入るものとしては、まず搾乳農場 **Молочные фермы** があげられる。彼らの冬の牧地には常設の住居その他の施設が用意されている [グライヴォロンスキー 1979: 109-110]。

モンゴルの経済学者ルヴサンドルジュによると、1960年代初頭から1970年代初頭までの約10年間に、国の農牧業人口は約30%減少し、国民経済および文化の他の分野に約14万人移動したとのべている。モンゴル人民共和国における都市人口と農村人口の変動をみると、都市人口は1956年の183,000人から1977年の719,000人に、つまり約4倍になったのにたいし、農村人口は1956年の662,500人から1977年の793,400人、つまり

わずか20%しか増加していない [グライヴォロンスキー 1979: 121]。

多くの新しい都市が誕生している。典型的な1例としては1956年当時小さな集落にすぎなかったダルハンがある。炭鉱、セメント工場、発電所、シリカト煉瓦などどの工場が建設され、1963年には人口8,000人、1977年には33,000人に達した。チョイバルサン市は人口20,000を数えている。

首都ウラン・バートルの場合、1963年の人口203,400人であったが、1977年には345,000人に達した。労働者・事務員の数でみると、1960年の総数144,600人から1976年の259,200人に増加している。

モンゴルにおけるこのような都市人口の増加は、遊牧民の定住化の過程としてとらえることができよう。

農村人口の都市流出とともに、農牧業の能率化がすすめられている。牧民経営の協同化とともに、例えば井戸数についてみると、1962年の12,800から1976年の29,700に増加している。牧草地の灌漑も積極的にすすめられている。家畜用の小屋は1962年の33,800から1976年の53,800に増加した。

1970年代のはじめ、農村人口の約40%、つまり約25万人が定住的生活を送った。これは小学校や幼稚園の子どもたち、さまざまな施設に属する人々である [グライヴォロンスキー 1979: 129]。

住居についてみると、ユルタ以外の固定住居は1960年から75年までの間に2倍になったが、ユルタの方は21.4%しか増加していない。なお、1972年における住居用ユルタの総数は246,500となっている。

全体として、モンゴル人民共和国における定住化は急速に進行している。1960年代はじめ、定住民は総人口の半分ちょっとであったが、1970年代の後半には約3分の2以上に達している。しかしモンゴル人民共和国政府は、遊牧的あるいは半遊牧的的生活を送っている牧民を、近い将来に定住化させる政策はとっていない。これはモンゴルにおける牧畜発展の現在の水準がみんなを定住化させる段階にはいたっていないとの認識にたっているからである。

モンゴル人民共和国における伝統的遊牧文化が急速に過去のものになりつつあることは、もはやいかなる歴史的な事実である。古代および中世を通じて世界史的役割を果たしたモンゴルは、ソ連をはじめとする社会主義諸国の積極的協力のもとに幾千年間存続した遊牧から定住への断乎とした移行によって、まさに世界史的な意義を持つ大実験の主役になっていると考えられる。しかもこの移行は、一方では急進的、他方では漸次的という二つの方法を利用しているようにみえる。すなわち、昨日の牧民が今日の鉱工業、機械化農業、サービス部門の労働者になることは急進に属し、遊牧的牧



民の定住化は漸次的なものと言えよう。

私〔加藤〕は1970年、1977年、1978年の3度モンゴル人民共和国を訪れる機会にめぐまれ、ウラン・バートル以外にも、ハラホリンやホシヨ・ツァイダムを見学した。とくに77年と78年の旅行の主たる目的は、国立民族学博物館の「モンゴル展示」のための標本資料収集を目的とするもので、モンゴル文化省の方の積極的協力によって、所期の成果をあげることができた。ところが展示作業をすすめるには、それについての基本知識が前提として必要である。モンゴル人民共和国の物質文化について、日本語でも若干の文献はあるが、いずれも簡単で充分とは言い難い。そこで、比較的新しく、しかもモンゴルの生活が大きく変貌しはじめた1960年代以前のフィールド調査に基づくこの論文を紹介することにしたしだいである。

3度の旅行を通じての私の印象からしても、モンゴル人はきわめて勤勉・有能であり、定住化という世界史的事業を見事に完遂することは疑いないということである。

最後に、標本資料収集にあたり、協力を惜しまれなかったモンゴル文化省、モンゴル外務省、日本外務省、在東京モンゴル大使館、在ウラン・バートル日本大使館（秋山大使はじめ館員の方々）、伊藤忠商事のみなさまに心から感謝する。

なお、ビャトキナのこの論文は、つぎの16章に分かれている。すなわち農牧業、狩猟、移動手手段、家内的な獣毛製品と皮革の加工、住居、衣服、飲食物、結婚儀礼、出産と育児に関連する儀礼・習慣、親族名称、氏族またはヤスンの名称、占い・俗信・伝説伝承、仏教以前の信仰の痕跡、古来の葬制、国民的祭りと遊戯、民衆的造型美術である。ここで紹介するのはこのうち、最初の7章、主として物質文化に重点をおいた部分だけである。ただしページ数でみると、全体の約半分弱である。

訳文のうち、カッコなしの注は原注を整理したもの、カッコは訳注である。

## Ⅱ．モンゴルの伝統的物質文化

### 著者はしがき

以下の民族学的資料は、1948-49年モンゴル人民共和国において、ソ連科学アカデミーおよびモンゴル人民共和国科学委員会<sup>1)</sup>が組織し、団長キセリョフ С.В. Киселев に指導された歴史・民族学的調査団 Историко-этнографическая экспедиция によって採集されたものである。この調査団において、著者は民族学班を担当すること

1) 1961年5月、モンゴル科学アカデミーに改組された。人文科学、生物・地質学、物理・数・化学の3部面に大別されている。1978年現在、研究員約700人。

になったが、班員にはチョイバルサン記念モンゴル国立大学の言語学科の学生およびモンゴル人民共和国科学委員会の研究員バガエフ Г. Б. Багаев が加わった。

研究班は、1948年にはモンゴル人民共和国の西部でつぎのようなコースで調査を行った。すなわち、ウラン・バートル、エルデニ・ツー、ツェツェルリク、ツァガン・オロム、コブド、ウラン・ゴム、そこからウブサ・ヌール湖の南側沿いにトゥルン ソモン<sup>2)</sup>、ソングン ソモンを経由してウリヤスタイ市に出た。調査班はウリヤスタイからツァガン・オロムへ出て、そこで一まわりのコースを終り、もとの道を通してウランバートルに帰った。

1949年には、調査班はモンゴル人民共和国の東部で活動した。すなわち、ウラン・バートルからモンゴ・モリト ソモンに出、そこからウンドゥル・ハンへ向かい、ケンテイ地域およびオノン川流域で調査した後、チョイバルサン市を通過してケルレン川の左岸に出た。つづいてウズムチン *узумчин* および近年モンゴル人民共和国のケルレン川右岸地域に移住したバルガ・ブリヤト *барга-бурят* の住むソモンを通過して、南はガル・シャルイイン ソモンに達し、そこからウンドゥル・ハンを経由してウラン・バートルに帰った。

調査班の任務は民族学的資料の収集および調査の途中で出会う考古学的遺物の記録 *фиксация* であった。

調査班の主たる関心は共和国の農村地域に集中された。そこにはハルハ・モンゴル、オイラト (デルベト、バイト、オリョト、ミンガト)、ホトン (起源はチュルク)、サルトル、ブリヤト、バルガ・ブリヤト、ウズムチンおよびハムニガン (起源はツングース) などさまざまな民族が住んでいた。西部のアイマクではソモンの住民の民族構成に関するデータを得ることができた。すなわち、ウブサヌール アイマクでは、住民はつぎのように分けられた。デルベトの住地は、ウランゴム ソモン、サギル ソモン、トゥルグン ソモン、ウムノ・ゴビ ソモン、ホブド ソモン、ヴウヘ・モリン ソモンである。バイトの住地はテス ソモン、ズンゴビ ソモン、マルチン ソモン、ヒルガス ソモン、タリアラン ソモン。ハルハの住地はザプハン ソモン、ウンドゥルハンガイ ソモン、ズンハンガイ ソモン、トゥルン ソモンである。

コブド アイマクでは、ソモン住民の部族構成はつぎの通りであった。

- 1) エルデンブレン ソモンはオリョト 2) ミンガト ソモンはミンガト、デルベト、オリョト 3) ブヤントゥ ソモンは混住であるが、主力はハルハ (タリャチン) 4)

2) モンゴル人民共和国は行政的に18のアイマク (県) に、アイマクはいくつかのソモン (村) に分けられる。人口6,000人以上の町をホト (市または町) という。

チンダマニ ソモンはトゥムト 5) ハイラン ソモンはハルハ 6) タルビ ソモンはハルハ 7) ツィルギ ソモンはザハチン 8) マングハン ソモンはザハチン 9) ムンフハイルハン ソモンはザハチン, ウリャンハイ (言語はカザフ語) 10) ツィツィク ソモンはハルハ, ザハチン, デルベト 11) アルタイ ソモンはザハチン 12) ウェンチ ソモンはザハチン 13) ブルガン ソモンはトルグート, ホシュト, ザハチン, ウリャンハイ 14) トウタ ソモンはハルハ, ザハチン。

バヤン・ウルゲイ アイマクにはカザフがみられる。

民族学調査班によって集められた資料は1947-1948年当時のアラト(牧民)の文化と生活の状態を示している。この頃、農村住民の経済において発展しつつあった社会主義的ウクラード(経済体制)の規模はまだそれほど大きくなく、家畜の個人所有をともなう小商品生産が優越していた。それ以後モンゴル人民の経済・文化の発展における成功によって、アラトの生活と文化は大きく変化した。しかしこの変化を、本論文において考慮に入れることはできなかった。著者が同じ調査地域を再び訪れることができなかっただけに、なおさらそれは困難であった。

フィールド資料の記録はすべてモンゴル語によってなされたが、これについては調査班中の学生たちに負うところが大きい。フィールド資料の整理にあたって、私はその記述と翻訳だけでなく、場合によっては文献資料を引用して、それを分析することにつとめた。

## 農 牧 業

モンゴルの住民の経済活動の基礎は農牧業で、住民の70%を占めている。

モンゴル農牧業の主要な分野は牧畜である。そしてモンゴルの遊牧経済 *кочевое хозяйство* における主要な動物は羊 *овцы*, ヤギ *козы*, ウマ *лошади*, ラクダ *верблюды*, ヤク *яки* またはサルルィキ *сарлыки* およびその他の大型有角畜(牛のこと)である。

広大なモンゴルのステップは、植生の貧しいゴビの南部および南東部地域をのぞけば、見事な天然の牧草地である。したがって、四季を通じて家畜を牧草地で維持することが、ここでは主な形態を占めている。アラトが家畜の牧草を確保するために定期的に移動する必要性はこうした状態に起因している。

移牧 *перекочевка* の距離と季節的な牧地の特徴は、いたるところ同じというわけではない。ハンガイ地方では牧草が豊かであるため、移牧の距離は遠い。夏の牧地は、ここでは川岸であり、冬はより標高の高い場所である。

牧草の少ない丘陵・平原的なステップ地帯では、移牧の距離は50 km以内である。夏期、家畜は水場の近くの低い場所で、冬期には主として高原の南斜面で放牧される。

西部地域では、アラトは夏期主として山地に移る。これは、夏以外の季節には、この地域の牧草を利用できないためである。冬は山地の低いところの下る。ハンガイの南部地帯および共和国の東部地域では、アラトは夏期には家畜とともに山中に住み、冬期には雪のないゴビの低地に移る。

モンゴル人は革命前、牧草刈りも、冬期用の飼料準備も知らなかった。また彼らには、家畜を寒さ、雨、猛獣から守るための建物もなかった。彼らの家畜が獣医の援助をうけることもなかった。

きびしい冬と、春のゴロレディツァ гололедица（急に雪解けがきて、その表面が氷結した状態）のために、家畜が雪または氷の下から牧草をとって食うことができず、大量の餓死を招くことがしばしばあった。またペスト чумы、炭疽 сибирские язвы、馬鼻疽 саян、口蹄疫 ящур その他の疫病のために、家畜の50%ないしそれ以上が倒れることもあった。

モンゴルの牧畜は、今日でも自然条件に多く依存していることは言うまでもないが、しかしモンゴル人民共和国政府は牧畜経済の向上のために、絶えずエネルギーな方策をとりつづけている。とりわけ、獣医学的な援助組織に大きな注意がはらわれている。1924年、ウラン・バートルに最初の獣医学校が開かれ、1925年には細菌学研究所が活動しはじめた。

その後、モンゴルにおける獣医網は著しく広げられ、その結果、アラトの牧畜経済の状態は目に見えて向上した。

モンゴル人民共和国の成立当初から、共和国政府は牧畜経済において、飼料ベース確保を重要な施策としてとりあげてきた。共和国の各地域ではソ連邦の学者たちの協力のもとに、牧草の種蒔き、土壌の質の改良、牧草刈りおよび牧草地の改良、新しい牧草地の開発などの試みがなされた。

農業の技術分野でも大きな変化がみられた。1937年にはすでに、ソ連邦は無償で、トラクター、草刈り機その他の機械をつけて、10カ所の機械・草刈ステーションを譲渡した。これは牧畜の改良に重要な役割を果たした。それ以後、モンゴル人民共和国にたいするソ連の友好的援助は組織的なものとなった。現在では、国内で国营農場 госхоз および機械・牧畜ステーションの網がつくられている。国营農場では草刈りと播種の面積が拡大され、牧草を生やすための方策がとられ、人工肥料および鉬物飼

料 *худжир* が利用され、適量の乾草による家畜、とくにその母親と子どもとの飼育が行なわれている。

国営農場は牧畜と農耕を結合させた大経営に変わった。ここには新しい技術が導入され、農耕と牧畜の文化が高められ、農耕と牧畜の質の高い勤労者が養成されている。

国営農場は機械・牧畜ステーションとともに、農業の改良に重要な役割を演じている。

国家は国営農場においても、アラトの個人経営においても、牧畜を発展させるためのあらゆる施策を講じている。

国内では、アラトの自家経営の中でも牧草刈りが広まりつつある。国家はアラトに、牧草の用意、農業用の道具、良種の種家畜の取得その他のために、貸付けを行なっている。

家畜飼育のプランを遂行した私経営にたいしては、さまざまな、しかもかなり著しい特権があたえられている。こうしたことによって、モンゴル人民共和国の家畜頭数は目に見えて増加した。先進的なアラトは家畜の増産に大きな成果をあげている。そうしたアラトにたいしては特権だけでなく、賞金や価値ある贈与、「共和国功労牧畜民」の称号、勲章、メダルなどが贈られている。

牧畜経済の発展において、労働と労働力を経済的に、また効果的に利用する目的で、アラトはホトン *хотоны*（共同で家畜の世話をする組合 *товарищество*）に統合されている。革命前、オイラトはホトンまたは遊牧集落をつくって遊牧した。当時それは、遊牧をともにする近親からなり、その長として長老 *аха* がいた。しかしホトンでは、民族的な相互援助の名のもとに貧しい同族からのひどい搾取の行なわれる場合も少なくなかった。

革命後、ホトンにおける統合は、新しい、民族的でない基盤のもとで成立しはじめた。ここではまだ、家畜はアラト各人の私有物である。組合の各成員は個人の労働によって作業に加わり、家畜数に応じて出費（収入も）を負担しなければならない。

またアラト間では、井戸掘り、ハジャン（家畜用のかこい）の構築における単純な共同形態が広まっている。一部の地域では草刈り、西部地域では畑地の灌漑工事も共同でなされている。

生産関係の新しい形態として、経営を共同ですすめるための、アラトの自由な協同がある。これは生産協同の最も高度な形態である。農業上のアラトの協同は、とりわけ牧畜の場合であるが、アラトの家畜の一部と農業用具を社会化している。社会化された生産手段は協同組合の成員の共同所有である。各経営は私有としてユルタ、生産

用の建物、荷車、馬具、細かい農具および家畜の一部を所有している<sup>3)</sup>。

以下、国内の多くの地域において、現代のアラト経営にまだ残存している牧畜の民衆・伝統的技術と方法についての短いデータが紹介される。

われわれはこれらのデータをフィールド調査の過程で集めた。モンゴル人民が困難な歴史的条件のもとで開発してきた家畜保持の古い方法(これにはおくれた技術と、生産力発展の一般に低い水準が示されている)は近いうちに消滅し、新しい先進的な牧畜技術(これは人々の労働を軽くし、経済の生産性を高める)が登場することは疑いない。しかし、モンゴル人民の文化の歴史において、ここに紹介される資料も一定の価値をもつことであろう。というのは、これらのデータは、モンゴル人民がおくれた経済的・文化的水準から出発しながらも、いかにして歴史的に短い期間に、数千年かかって達成した経済・文化の成果を凌駕する進歩をとげ得たかを示すであろうから。

フィールド資料の記述をはじめるとき、モンゴルの牧畜地域を通過するとき、まず目に入るのはハシャンであることを指摘しておく必要がある。これはモンゴル集落地の古来の風景を変化させただけでなく、きびしい冬期の条件における家畜の保持を可能にしている。ハシャンはユルタのそばにある小さな広場で、牛・馬・羊の糞を細かくして層になるように敷きつめたものである。この広場のまわりに木、石または粘土の壁が築かれている。場合によっては支配的な風の吹く側だけに壁をつくることもある。冬期は、羊とヤギは集まって、朝からハシャンの中で横になっている。太陽が上ってあたたかくなってくると、羊群は牧草地へ追い出され、日没まで牧夫の監視のもとにおかれる。ラクダは牧夫なしで放牧され、夕方ユルタに追いもどされる。

馬は冬の間じゅう牧草地におかれ、ユルタのそばへはつれてこられることはない。

冬期、場所によっては、とくにゴビにおいては、畜群のために水のない牧草地が利用される。ここでは雪が深くないため、人の居住地からかなり離れた距離で馬群を牧することができる。ふつう数人の馬所有者が一つの馬群をつくり、共同で牧する。

冬期または春期に生れた仔羊や仔ヤギは、人の生活しているユルタの左半分につないで、乾草で飼育する。乾草はまた、病んでいる家畜やひどく痩せた家畜にあたえられる。ときには、タルバガンの脂をあたえることもある。

夏期、仔羊を羊群とは別に放牧する代わりに、朝、母羊から離して別の群に入れて

3) 現在では牧農協同組合(ネグデル)と国営農場がある。1977年の調査では、全国のネグデル数は259、各ネグデルの平均家畜数は69,000頭である。国営農場数は47、うち11カ所は飼料農場。ネグデルの組合員は労働報酬の分配を現物または金銭で受けるが、ネグデル所有の家畜を安く買うことができ、共同の家畜のほか、組合員1人あたりハンガイでは10頭、ゴビでは15頭、1戸あたりハンガイでは50頭、ゴビでは75頭の私有が許され、個人財産として飼うことができる(吉田実氏の前掲による)。

放牧させる方法は興味深い。群に入れても、仔羊は別の母羊の乳を吸わない。こうした方法をとれば、仔羊だけを分けて放牧しなくてもすむ。家畜は日の出とともに搾乳され、少年少女の監視のもとに牧草地に送り出される。彼らは馬を乗りまわしながら家畜を牧するのである。

ラクダは、我慢強く、手のかからない動物であるが、しかしたいへん注意深く面倒を見てやる必要がある。とりわけ旅行中がそうである。キャラバンで遠路を行くとき、主人はこの動物のために、はじめの数日間、夜間の宿営のとき、ごく限られた量の飼料をあたえ、水を飲まさないようつとめる。冬は、キャラバンの宿営地の雪をとりのぞく。ラクダが地上に横になったとき、かぜを引かないようにするためである。また夏期においても、ラクダが夜間湿った場所に横にならないように注意する。

馬やラクダを群の中から捕えるには、特別な敏捷さと熟練が要求される。それはふつう、馬に乗った人が投縄 *аркан*、または、引き寄せるための縄や革紐の環を端末につけた長い棒 (*урга*) を利用して行なう。ふつう馬上の人が目指す動物をすばやく追いかけ、その首に縄の輪を上手に投げかける。

モンゴル人の幾世紀にわたる家畜飼養の伝統は、牧畜に関連する豊かなターミロジーに反映されている。同じ動物でも年齢によって名称が異なるのもその証拠の一つである。例えばウナガン *унаган* は生後1年目の仔馬、ダアガ *даага(н)* は生後2年目の仔馬、シュドゥレン *шүдүлен* は生後3年目の仔馬、グナン・ウヘル *гунан үхэр* は3歳の雄牛、グンジン・ウヘル *гунжин үхэр* は3歳の雌牛といったたぐいである。家畜の名称を一覧表にしてあげてみよう。

あらゆる種類の家畜の乳が利用されるが、主な搾乳動物は、牛、サルルィキ(ヤク) *сарлык(яки)*、ハイニキ *хайники* (大型有角畜の混血種)、羊、ヤギである。雌馬と雌ラクダからはあまり搾乳しない。ただし夏の間だけである。雌馬の乳はクムイス (馬乳酒 *кумыс*) に用いられる。昔は、雌馬の搾乳には男性があたった。『モンゴル秘史』の中に、テムジンが奪われた黄褐色の去勢馬を探し求めてボルチャーのところに行ったとき、ボルチャーは雌馬の乳をしぼっていたとの記述がみえる。搾乳の方法は家畜によってまちまちである。例えば、羊は後方から、雌牛は右側から、雌馬は左側から、右手で家畜の脚を抱き、膝の上に木桶をおいて搾乳する。搾乳の前に、母親のところ仔牛や仔馬を近づけ、わずかに乳を吸わせる。仔牛や仔馬が死んだ場合には、他の母親の仔に吸わせたり、かかし [剝製] *чучело* をつくって、搾乳の間じゅう母親の前にたてておく。

濃度と脂肪の量において最高の乳はサルルィキ(ヤク)のものとされ、2番目は羊、

表1

<i>адуу</i>	馬群	<i>охин тором</i> (1) <sup>1</sup>	2歳の雌ラクダ <sup>*</sup>
<i>азрага</i>	雄馬	<i>унага</i>	仔馬
<i>гүү</i>	雌馬	<i>эр дааг</i> (1)	2歳の仔馬
<i>эр морь</i>	馬 ( <i>лошадь</i> )	<i>охин дааг</i> (1)	2歳の雌馬
<i>гунан мррь</i> (2)	3歳馬	<i>шүдүлэн</i>	3歳馬
<i>гунжсин гүү</i> (2)	3歳の雌馬	<i>гунан тэмэ</i> (2)	3歳の雄ラクダ <sup>*</sup>
<i>дөнөн морин</i> (3)	4歳馬 ( <i>Конь</i> )	<i>гунжин ингэн</i> (2)	3歳の雌ラクダ <sup>*</sup>
<i>дөнжин гүү</i> (3)	4歳の雌馬	<i>дөнтэмэ</i> (3)	4歳の雄ラクダ <sup>*</sup>
<i>үхэр</i>	大型有角畜	<i>дөнжин ингэн</i> (3)	4歳の雌ラクダ <sup>*</sup>
<i>бух</i>	去勢されない雄牛	<i>хонь</i>	羊 (一般的名称)
<i>шар</i> }	去勢した雄牛	<i>хуца</i>	種羊
<i>цар</i> }		<i>эрги</i>	去勢された雄羊
<i>үнээн</i> }	雌牛	<i>эм хонь</i>	雌羊
<i>эм үхэр</i> }		<i>хурган</i>	仔羊
<i>тугал</i>	仔牛	<i>гунан хонь</i> (2)	3歳の雄羊
<i>эр аяруу</i> (1)	2歳の仔雄牛	<i>зусаг хонь</i> (2)	3歳の雌羊
<i>охин бяруу</i> (1)	2歳の雌牛	<i>бөнөн хонь</i> (3)	4歳の雄羊
<i>гунан үхэр</i> (2)	3歳の若い雄牛	<i>дөнжин хонь</i> (3)	4歳の雌羊
<i>гунжин үхэр</i> (2)	3歳の雌牛	<i>ямаа(н)</i>	ヤギ (一般的名称)
<i>дөнөн үхэр</i> (3)	4歳の雄牛	<i>сэрхэ</i>	去勢された雄ヤギ
<i>дөнжин үхэр</i> (3)	4歳の雌牛	<i>тэхэ</i>	種ヤギ <sup>*</sup>
<i>тэмэ</i>	雄ラクダ	<i>ишиг</i>	仔ヤギ <sup>*</sup>
<i>буур</i>	種ラクダ	<i>гунан ямаа</i> (2)	3歳の雄ヤギ
<i>ингэн</i>	雌ラクダ	<i>зусаг ямаа</i> (2)	3歳の雌ヤギ
<i>атан</i>	去勢された雄ラクダ <sup>*</sup>	<i>дөн ямаа</i> (3)	4歳の雄ヤギ
<i>ботго</i>	仔ラクダ	<i>дөнжин ямаа</i> (3)	4歳の雌ヤギ
<i>эр тором</i> (1)	2歳の雄ラクダ <sup>*</sup>		

牛, ヤギがこれにつづく。モンゴル人は、彼らの民衆の観念によれば、家畜を二つのカテゴリーに分けている。すなわち、ハルウン・ホシュウ・マル *халуун хошуу мал* (熱い息のもの) とヒテン・ホシュウ・マル *хитен (хуйтэн) хошуу мал* (冷たい息のもの) である。

そして「熱い息のもの」がすぐれた家畜とされるが、これに属するのは馬と雄羊 *баран* である。ラクダ, ヤギ, 大型有角畜は「冷たい息」をもつとされ、その肉は「冷やすもの」であって、人間の体にとっての有益度がうすいとされ、病人にはこれらの肉を決してあたえない。雄羊と馬の肉は有益で体を「温めるもの」とされている。雄羊の肉は最高のごちそうとされている。

1. カッコ内の数字は家畜の生後から数えた年齢である。以前モンゴル人は人間と動物の年齢を生後からではなく、懐妊の時点から数えた。質問にたいして、アラトはつねに、「法律」による年齢とモンゴルの民衆の伝統で数えた年齢を教えた。



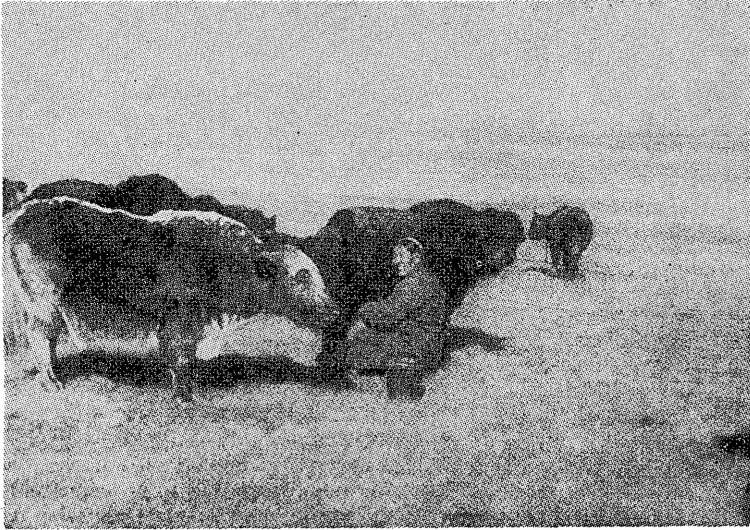


写真1 ヤクの搾乳

牧畜の重要な産物の一つに羊とラクダの毛がある。羊の刈りこみは1年に1度行なわれる（6月-7月）。一家の経営においては、ラクダの毛は春の脱毛（5月）のとき、それが束になって落ちるとき、手で拾い集める。彼らはその毛を売ったり、自家用にしたりする。ユルタ用のフェルト、紐、糸、袋その他はこの毛からつくられる。羊の毛からは冬服が、有角畜の皮からは帯革、履物、皮袋、長い毛からはユルタと投縄用



写真2 牧夫は、井戸から水を汲み出すための皮袋を持っている

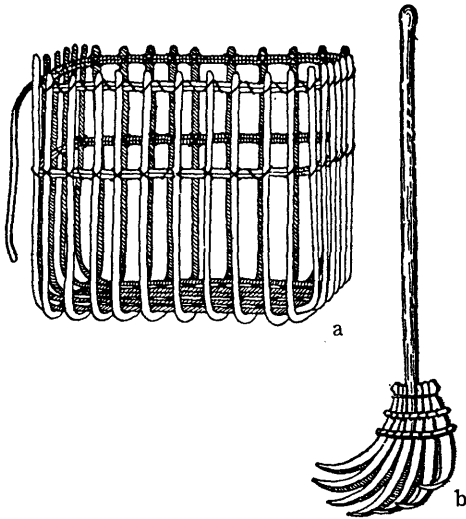


図1 a—アルガルを集めるための籠(アラグ)  
b—アルガルを集めるための熊手(サヴォル)

の縄がつけられる。とくにサルルィキの長毛が縄の材料としてよいとされている。

アラトの経済において必要な牧畜産物の一つにアルガル *аргал* (牛馬の乾燥した糞) がある。これは燃料として利用され、また細かく砕いた状態で、冬期に家畜の下に敷かれる。国内のかなりの部分に森林がないため、アルガルは主な燃料となっている(最良の燃料は牛馬の糞で、ラクダと羊の糞はこのために用いられない)。冬期用のアルガルの準備は夏期行なわれる。ふつうこの仕事には女性、子ども、老人が加わる。

これを集めるには、四角形の特別の籠 (*араз*) が用いられる。この籠を肩にかけ、籠の横にとりつけられた紐を左手で固定する。日光で乾燥したアルガルは熊手状のシャベル (*савор*) を利用して籠の中に投げ入れる。集めたアルガルは山に積み上げる。

かつて、アルガルはアラトによって領主のために大量に集められた。その採集はアラトにとって重い現物税の一つであった。

モンゴルの遊牧民は、幾世紀にわたって牧畜を生業とした結果、すばらしい視力、観察力、方位感覚を身につけている。彼らは馬群や羊群の中で自分のものを誤りなく見分けることができるし、また見えるか見えないほどのわずかな徴候によって、自分たちの畜群の場所を見つけることができる。彼らの場合、古来の多くの伝統や前兆が家畜と結びつけられている。デルベトからきいたいくつかのことをあげてみよう。

ユルタのそばで縄 (*дээр*) につながれた仔羊、仔牛、あるいは仔馬が落雷で死んだときには、それ以後、主人はなんびとにも、乳製品と塩を、彼のユルタから持ち出すことを許さない。この禁は父から子につたえられる。

炉の灰は、家路についている家畜に向かって決して投げてはならない。旅が幸せであるように、デルベトは馬に乗る前に数滴の乳を左側の鐙にかける。いよいよ出かけるときには、必ずユルタのまわりを太陽の運行にしたがってまわる。「太陽にしたがってまわる」 *герийн зов эргэна* とデルベトは言う。デルベトの男性はユルタの左

側で馬をおりないし、馬を左側からつながない。必ずユルタの右側でおり、右側から馬をつなぐのである。女性はこの場合、反対である。

モンゴル人は昔から馬にたいして大きな愛情と敬意をもって接している。とくに尊敬すべき人の招待のためにモリルフー *морилху* (モル *морь* 馬に由来) という言葉がある。これは「お入り下さい」「おかけ下さい」という意味である。20～30年ほど前までは、大きな馬群の中に必ず最高神または天(テングリ)に献げた (*сетертей*) 馬がみられた。この馬の長いたてがみには赤や黄色の布地が編みこまれてあった。この献馬に乗ることのできるの持主だけで、たてがみは決して切られなかった。

もし他人が献馬に乗れば、その馬はけがされた (*гэм сүх*) と考えられた。また畜群や馬群の中で家畜が死にはじめる場合も、その献馬がけがされたと考えられた。こうした場合には、ラマを招き、祈禱をあげてもらい、ヨモギをくゆらせて、これを「浄めた」。雄羊や雄ヤギの供献も行なわれた。

動物の「供献」の儀礼はラマによってとり行なわれ、サン タビフー *сан табиху* とよばれた。この儀礼では、祈禱をあげ、動物を煙でいぶし、乳および浄められた水 (*аршан*) をそそぎかけた。馬のたてがみは編まれるが、これに多色のリボンが編みこまれた。雄羊と雄ヤギの場合にはリボンを首に下げた。

馬利用の古い伝統は、奥地における古い世代のモンゴル人がごく最近まで、馬に車をひかせなかったことにも現われている。馬は高貴な動物と考えられ、雄牛のように車をひかせてはならなかった。

馬の歩きぶりにも特別の名称があった。すなわち、ホニイン ジョロー *хониин джороо* は「細かい歩きぶり」であり、テメエヌイ ジョロー *темээний джороо* は「だく足」、ウトゥガン ジョロー *утуган джороо* は「跳ね足」である。

動物の病いを治すには、以前、呪術的方法も用いられた。例えば、ハルハ・モンゴルの間で、われわれはつぎのことを記録した。すなわち、動物が病んで地面に倒れると、棒をもって地上にその動物像の輪郭を描いた。そしてその動物像を鞭でたたきながら言った。

チ ウリヒン モル (またはホニ、ウヘル、テメエー) アヴ、ビ ウリヒン モル アヴン *Чи урихин морь (или хони, үхэр, тэмээ) ав, би урихин морь авн* 「お前はお前の馬 (または羊、牛、ラクダ) をとれ、私は自分のものをとる」と言った。言い代えると、動物をとりあげようとしている「悪い霊」にたいして、動物そのものではないに、その像をとれと提案したわけである。ときには、動物が地面に倒れたとき、ハルハはГазラ エイフ *газра эйх* [地面からなにか起った] と言った。この場

合には石を拾って動物に臭いをかがした。

モンゴル人民共和国では、気候および土壌の条件によって、農耕は住民の主要な生業でなかったし、今でもそうである。ただし、近年農業の発達に重要な意義が付与されてはいるが——。現在、農業経済において、機械・草刈りステーションから転換された国営農場 *Госхозы* が大きな役割を演じている。われわれは、そのうちのいくつかを訪問することができた。1948年、西部ではトゥルン ウブサノール アイマクの国営農場を訪れた。それはトゥルン川の岸にあり、事務所は粘土の建物、労働者・勤労者はユルタに住んでいた。私たちの訪問のとき、農場は創立後わずか3年目であった。1945年、草刈りステーションとして組織され、1946年、国営農場に改編された。

農場の主要な支柱は羊の飼養であったが、しかし当時すでに、コムギ、オオムギ、ジャガイモが面積 100 ha の土地でつくられていた。国営農場としては、アラトに農耕や野菜栽培の分野を紹介し、彼らの間に現代的農業技術を広めるという課題があった。農場の野外作業には、当時すでに専用の草刈機、鋤のその他の農業機械が確保されていた。さらに国営農場は、国民経済を高め、アラトの牧畜および農業経済に新しい技術や方法を導入するという直接的な機能だけでなく、定着的な拠点として、学校、クラブまたは「赤い小さな広場 *Красный уголк*」、医療センター、獣医センターなどをそなえた文化的中心の役割をはたしていた。

1949年、われわれはケンテイ アイマクのノル布林 ソモンの国営農場で、面積 600 ha の土地にコムギ、オオムギ、エンバクの播種されているのを見た。またここでは、10 ha にジャガイモ、キュウリ、トマト、ネギ、キャベツ、葉タバコが栽培されていた。国営地場は年々播種面積と草刈り場を広げていた。ここではさらに、メリノ種の細羊および良種の馬の飼養を実験している。農場には農業機械の大きな格納場があった。

われわれは、モンゴルのアラトの農耕においても、牧畜の場合と同様に、農耕の民衆的な方法や技術がいくつかの点でしだいに消滅していきつつあるのを目撃した。

アラトのうち、過去において農耕に従事し、今も従事しているのは西部のモンゴル人（デルベト、バイト、ザハチン、ホシュト、トルグート）である。われわれは主として、ウラン・ゴム地方のデルベトの間で観察し、これについて資料を集めることができた。彼らはコムギ、キビ、エンバクを播種している。播種に適した土地（しばしば碎石や小石におおわれている）はふつう数戸に属し、いくつかの個人所有の区域に分けられている。その面積は 2 ha を越えない。播種は5月のはじめから行なわれる。灌漑用水は山の溪流からの水路から引かれる。

水路は共同で引かれ、その長さはときに 20 km に達する。播種地には耕す前に、施肥のためにしばしば家畜がつかれる。収穫はふつう 8 月にはじまる。乾草用の大鎌に似た形の鎌ハッドゥル *хадуур* で刈りとられる。ハッドゥルの柄の長さは 50 cm 以内で、歯の部分は長さ 20 cm、幅は 5～6 cm である。地上で乾燥された穂は雄牛または馬で打穀されるが、このためには土壌の固い場所が選ばれ、その中央に柱を打ちこみ、それに先導の馬または雄牛をつなぐ。残りの動物は二列縦列に互いに首で結びつけられ、ぐるぐるまわるように追いたてられる。打穀場はハラム *харам* とよばれる。打穀された穀物は、シャベルまたは熊手 (*аур*) でかきまわされ、投げ上げられて、風で選り分けられる。穀物の貯蔵にはさまざまな袋、とりわけ皮袋がよく用いられる。穀物を食用にするときには、まず釜に入れて焼き、石製の穀擦器でつぶしたり、丸木から彫りぬかれた木臼 (*ур*) で搗いたりする。

デルベトの古い世代は、われわれが調査したとき、農耕に結びついたいくつかの過去の伝統をまだ保持していた。例えば、ウラン・ゴム付近に住んでいたデルベトは、播種の後オボ *обо*<sup>2</sup> に出かけ、お茶をわかし、四方に向かってそれをふりかけた。彼らはオボの前で穀粉と混ぜたヨモギを焼き、犠牲としてオボにお金やハダクを供えた。お茶をふりかけるとき、つぎのように言った。*Хорхира хальж эвэлж, хамог амитны тэжэл өргөжтгэй* [ホルヒラ<sup>3</sup>をして、あふれせしめ、自らの水をあたえる用意あらしめよ、生きとし生けるものの食物を豊かならしめよ]。

古いモンゴル、主としてその北部、さらにはコブド地方および他の大都市では、ムギや野菜は少数の中国人植民者の手で栽培された。前世紀すでに、清国政府（モンゴルはこの権力下にあった）は中国人にたいし、外モンゴルで農耕に従事することをきびしく禁じた。1845年宣宗治下の法令によれば、モンゴルの領主たちは、この法令に違反したものは2～6年間俸給停止処分をうけた。ときには降等されることもあった。違反者が官吏でない場合には、9カ月間首枷をかけられ、刑が終わった後100打の笞刑に処せられた。

19世紀初頭以後、北京で得た特別許可をもとにしたトゥシエトゥハン アイマクの中国人だけは例外であった。法令は彼らとその後継者に土地の耕作を許したが、しかしこの場合にも、モンゴルの領主たちのきびしい監視下で行なわれた。

こうした条件のもとで、1804-1805年ハラ川およびイロ川の流域にあった耕地は、法令によれば、法令発布前に許可された範囲内にとどまるべきであった。

2. オボは山や丘の頂上に石を積みあげたもので、その土地の靈に礼拝する場所である。古い時代には、それはしばしば氏族の山の頂きにつくられた。

3. ホルヒラはウラン・ゴムの下の川で、そこからの運河によって畑地がうるおされる。

現在、すでにのべたように、モンゴル人民革命党およびモンゴル人民共和国政府は農耕の発達に大きな意義をあたえ、その結果穀粉の輸入量を著しく減少させ、自国産のムギをもって住民の需要をまかなうことを可能にしている。

## 狩 獵

狩猟に関する以下の資料は、主として、われわれの質問にたいするアラトの回答に基づいたものである。

ハルハはつぎのようなけものを狩猟の対象としている。すなわち、オオシカ (*бугу*)、ヘラジカ (*хандага*)、ヤマネコ (*шулүүс*)、テン (*булган*)、リス (*хэрэм*)、スローク (ロシア語 *сурок*)、タルバガン (*тарвага*)、イノシシ (*гахай*)、野生ヤギ (*гур*)、アナグマ (*зэгээ*)、カモシカ (*зээрэн*)、オオカミ (*чона*)、キツネ (*унэгэн*) などである。

オオシカを招きよせるために笛、シカのためには樹皮、白樺樹皮および草などでつくられた小笛が利用される。

以前、大型の動物のために仕かけ弓が用いられた。このための弓はカラマツ (*хар мод*)、弦は雄牛の背中部分の皮、鏃は3面のある鉄製のものであった。今では銃によって狩猟が行なわれている。大きなものは銃弾、小さいものは散弾で仕止める。

狩人が猟に釜を持たずに出かけるときには、乾燥した家畜の胃袋を持参した。彼らは宿営のとき、この中に焼き石を入れて肉をむした。

タルバガンの屍体も、その毛皮がまだあまり価値がないときには、内臓をとりのぞいて、同様に焼き石をつめた。こうしてむされた動物はボドグ *бодог* とよばれる。

タルバガン猟は白い衣服、ときには仔羊の毛皮を毛を内側にしてつくった衣服に、耳つきの帽子をかぶって行なった。狩人は必ず、多くの場合ヤクの尾毛でつくられたマハルカ *махалка* を手にした。狩人はタルバガンに接近して、マハルカを絶えず振りつづける。すると動物はこれに注意を奪われて、長い間同じ場所に停止するのである。

狩人の伝承によると、以前、タルバガンのためにはオオカミまたはオオシカの頭皮を剥いで、それを乾かし、狩人の頭にかぶせた。あるとき、狩人がその姿で動物の穴のそばに坐っていたとき、別の狩人がオオカミと違って彼を殺してしまった。それ以来、頭にオオカミやオオシカの頭皮をかぶることはなくなったという。

猟に出かけるときには、最良の食物の切片 (*дсжи*) を、その場所の「主人」である霊に投げあたえた。

また猟に出発するとき、女性は出かける人の後方から乳をふりかけた。狩猟のときには互いに喧嘩をしたり、動物の悪口を言ったりしてはならなかった。

大型の野生動物の皮革で容器が縫われた。雌のオオシカの毛皮でズボンとハラート(дели) [長い、前あきの上衣] が縫われた。同じ動物の雄の毛皮で靴をつくった。角 [ロシア語の панты] は以前、中国人に売った。ヤギの角から大針をつくった。

仕止めた動物の蹄はしばって木の下につり下げた。

ハルハの場合、猟のとき、いつわりの、または比喩的な名称で動物を呼んでいる。例えば、オオカミは *унеех жихагар*, イノシシは *тугдгер*, ヘラジカは *хабтагай өвөрт*, キツネは *малагай*, オオシカ (ロシア語の изюбрь (буга)) は *тураг* とよばれる。狩人が動物を期待していることを、狩人の会話を通じて動物にさとられないようにするためである。

ヘラジカの猟には、シカまたはヘラジカの皮を、毛を外側にして縫った靴 *бойтог* をはく。こうした靴をはくと、けものに人間の足音がきこえないのである。

食べられるけものを殺したときには、それを仕止めた人は、毛皮とズルト *зульт*, すなわち心臓と肋骨2本および4つの頭骨をつけた頭部を自分のものとしてとる。その動物が食べられないものであれば、猟師は、屍体からまるとと剥ぎとった毛皮 (*хеде*) だけをとる。後脚は毛皮につけたままである。これはノホイン メレグ *нохойн мэргэ* [もしイヌを捕えたら] とかブニ メレグ *буни мэргэ* [誰かが鉄砲で殺したなら] とよばれる。

モンゴル人は家畜だけでなく、狩猟の対象になる多くの野生動物についても、年齢による特別の名称をつけている。ハルハの場合におけるタルバガンとオオシカの年齢別名称をあげておこう。

タルバガン Тарбаган

1歳——メンデル *мендел*

2歳——ホトル *хотол*

3歳——シャルハツェル *шархацар*

4歳——ビルヒ (雄) *бирхи*

4歳——ナガイ (雌) *нагай*

オオシカ Изюбрь

1歳——ザルガル *заргал*

2歳——ソオンドイ, ホトル *сөөндөй, хотол*

3歳——タラグタル *тарагтар*

} 雌雄とも

4歳——ブドゥン ブガ (雄) *будун буга*

4歳——ソゴ (雌) *сого*

デルベトの場合、狩猟のために集まった人々はラマのところで、どの日が猟に最適かを占ってもらった。民衆の観念によれば、毎月8、15、30日が最も成功しやすいと考えられた。これらの日、(原則として)精神的誓いをたてた世俗の人々(主として男女の老人たち)は齋戒を守り、1日じゅう祈禱をあげた。

これらの日に殺されるか、あるいは死んだあらゆる生きものは幸せなもの(*буян-тай*)と考えられた。したがって、これらの日に動物を仕止めた狩人は、善行をしたと考えられる。

猟に出かける前、鞍、銃その他狩猟用具にはヨモギ(*арца*)の煙をかけ、祈禱をあげて(*ганцаган сане*)はらい浄められた。住居を出るときは右側へ曲った。

狩人がけものを殺し、獲物を分けたり、あるいはその毛皮を剥いている最中に、他人が現われ、*шорлога шорлога* [肉切れをあたえよ] と言えば、狩人は*огно* [あたえよう] と答え、獲物を分けた。この場合、そのとき現われた人が狩人よりも年長であれば、彼に上等な部分の肉があたえられた。

## 移 動 手 段

革命前のモンゴルでは、荷車と荷駄の輸送が知られているだけであった。国内には整備された道路も橋もなかった。移動のためには馬、ラクダ、雄牛が利用された。

現在では、国内のすべての重要地域に自動車輸送が行なわれ、舗装道路が通じている。鉄道はモンゴル人民共和国の首都と大中心地をソ連の鉄道と結びつけている。第二次5カ年計画(1952-1957年)でウラン・バートルから中華人民共和国の国境までの鉄道が完成した。

ウラン・バートルと国内各地、さらにはモスクワ、北京との間に航空路が開かれている。

地理的条件によって、水路はあまり発達していない。舟航はフブスヌール(コソゴル)湖、セレンガ川、そして部分的にはその支流であるオルホン川の下流部で行なわれている。

1949年まで、アイマクとソモンの間の公的輸送はウルトン、つまり駅通によって行なわれた。駅通は30~40kmの間隔であった。国家の牧畜税を納めるすべてのアラトは駅通の義務を負わされた。

1949年、モンゴル人民共和国政府はこの義務を全廃した。官吏の輸送は国費による



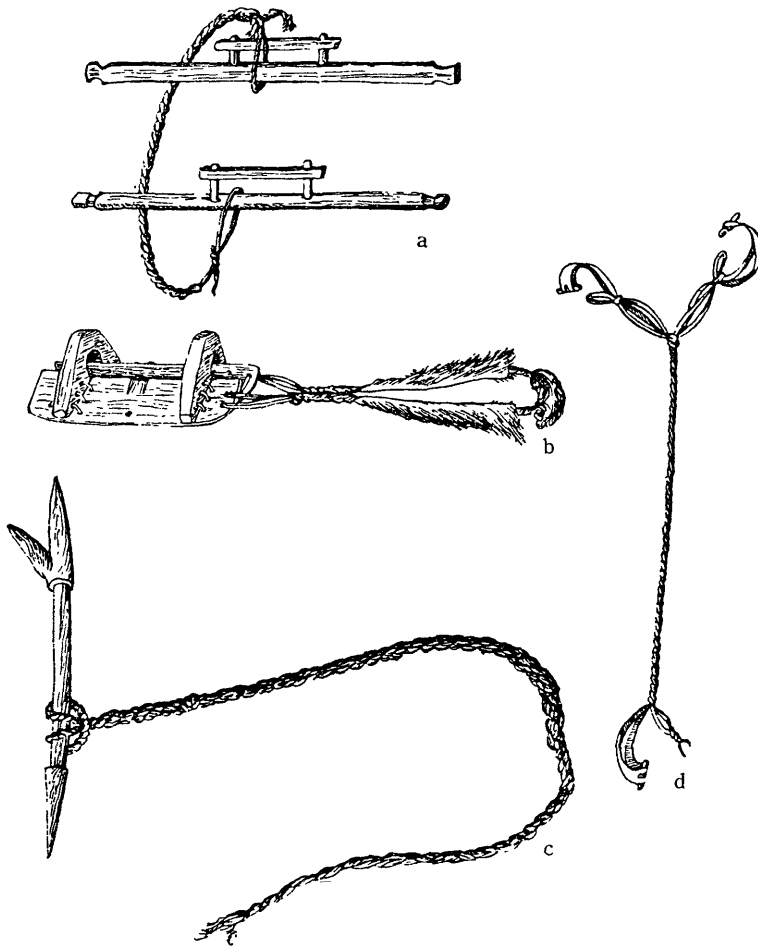


図2 a—ラクダの荷駄用鞍 b—雄牛の荷駄用鞍 c—ラクダの口綱と棒  
d—馬の前脚2本と後脚1本を結ぶ繫縄

こととなった。今では、共和国のすべての中心は自動車輸送で結ばれている。

しかし新しい移動手段は、今のところ、モンゴル人民が長い歴史の間に開発した、国の自然条件に合致する荷車および荷駄の輸送を全く廃棄するには至っていない。

馬、雄牛、ラクダが乗用および荷駄用として今でも、大きな役割を果たしている。一部の地域、とりわけ国の中央部および東部では二輪車をひくのに利用されている。男女、子どもを問わず、すべてのモンゴル人は、すばらしい乗り手である。

モンゴル遊牧民の、幾世紀にわたる移動手段における経験としての民族学的特徴は、今でもなお非常に明瞭に現われている。それは荷駄用および乗用の鞍、二輪車の構造、鞍のおき方、荷物の積み方などに現われている。

馬や雄牛のための荷駄用の鞍(янгирцаг)は、2個の重厚な弧木につながれた2枚の板からなる。板と弧木には穴があけられ、細い紐で結び合わされている。腹帯は鞍の上からかけられるが、そのために板の上に浅い切りこみがつけられている。板の後端に尻がいがとりつけられる。動物の背中に、まずフェルトの鞍敷きをつけ、その上から鞍を固定する。ラクダ用としては別の形の鞍がある。まずラクダの背がすりむけないように、またこぶを傷つけないようにフェルトを巻きつけ、両側の面に毛をつめた枕を敷き、これらすべてを棒で締めつける。荷物をラクダの背に固定するためには、手綱をひいてラクダを地面に横にならせる。「ソク、ソク」とかけ声をかけるとラクダは横になり、「ホク、ホク」と叫ぶと立ち上る。1頭のラクダに積まれる荷物は同じ重さで2分され、ふつう十文字に縄を巻きつけ、各荷物の上に輪索を残し、その一つに棒を固定する。荷物を積むときには、ふたりの人が両側から荷物を1個づつ持ち上げ、一方の荷物の輪索をもう一方の側の棒にひっかけ、ラクダの両側に荷物を締めつける。

ときには、荷物の上から背中と腹を通して縄を巻きつけることもある。こうした積み方は、キャラバンが停止したとき、あまり人手をかけずに荷物の積みおろしを可能にする。ふつう、1頭のラクダは180ないし250kgの荷物を積んで1日に30~40km移動する。ラクダの手綱は尾毛を編んだ縄からつくられ、一端はブル**буль** [ラクダの鼻の軟骨に通された小さな棒] に結びつけ、もう一端は手でにぎったり、あるいはキャラバンの行進中は、前を歩くラクダの荷物にしばりつける。手綱のほか、ラクダの顔面に端綱(革紐または尾毛の紐)をつけることもある。

ラクダで運ばれる荷物にはいろいろある。さまざまな工業製品、皮革、毛、尾毛などで、いずれにしてもていねいに梱包されたものである。大中心地の近くでは、建設用と燃料用の木材が運ばれる。アラトの移動のとき、ラクダにユルタの部品、ハナ**ханы**、ウニ**уни**、トン**тон**、フェルトのほか、内部の調度品を積んでいる光景によく出会う。この場合、ラクダの脇腹につけられた小さな籠に小さな子どもが入れられ、そのそばに母親が乗っている。キャラバンのそばを家畜が走り、家族のほかの成員たちも馬などに乗って移動している。キャラバンの先頭に、先導ラクダの手綱をとった人が騎馬または徒歩で行進している。このような移動風景の最も多いのは春または夏である。

砂地や小石まじりの土地を長期間歩くと、ラクダの足の裏が割れる。この場合にはラクダを横にねかせ、脚をしばり、枕状のやわらかい足の裏に、曲った長い針をつけて革を縫いつける。

中央部および東部では、ラクダに二輪車を引かせている。このために特別の鞍が利用される。これはラクダの前のこぶにかぶせられる。フェルトを楕円形に切り、その中央部に、こぶのための切抜きがつくられる。フェルトはとじ縫いされ、楕円形と切抜きの縁は色彩のあるリボン状のもので縁どりされている。楕円形の両側面に金属製の環が縫いつけられ、この環から背中を越えて、こぶのまわりに2本の尾毛製の縄がまわされ、フェルトを押えつけている。環の下に、同じく尾毛製の腹帯と二輪車の棍棒を固定するための紐がある。

モンゴルの経済におけるラクダの飼養は、歴史的にみてもわりあい後代の現象である。それが最も広範に広まったのはチンギスハン以後のことである。このことを裏づけているのは、荷駄用道具の名称におけるチュルク語の存在である。例えば、鞍の枕を意味するホム *хом*、手綱を意味するブルドック（チュルク語のブルン *бурун*「鼻」に由来）はチュルク語からの借用である。

モンゴルの乗馬用の鞍は細い形をしている。鞍橋の末端は骨片にてつくられている。鞍褥の上に、型押し文様で装飾された鞍皮があり、鞍褥の縁や隅も同じような型押し文様で飾られている。坐るところの上には、金具によって、布地のかぶせられたフェルト製の敷物が固定される。モンゴル人は以前、鞍と馬具の装飾に大きな意義をあたえていた。銀が豊かに使われていることは、持主の富の指標であった。娘が嫁にゆくとき、その両親は娘のために必ず、さまざまな装飾のある鞍と馬具をつけた馬をあたえることになっていた。

モンゴルの荷車は二輪車で、車輪は木製、矢と軸受函は十字繋ぎの角材 *крестовины* で代用された。心棒のその十字角材の接合点につくられた四角形の穴にさしこまれる。

二輪車は共和国の中央部と東部で用いられる。西部モンゴルのオイラトは全体として荷車を利用しない。二輪の荷車による移動法は古くからモンゴルに知られていた。『モンゴル秘史』にはそれは *хара утай терге* [「黒い幌の車」とパツラディー・カファロフ *Палладия Кажарова* は訳した] とよばれる。例えば、ホリラルタイ・メレゲンガ「森」の部族ホリ・テムドの住地からブルハン-ハルドゥンの山へ移動するとき、彼のもとには覆いのある車ハラウタイ *テルゲ хараутай терге* のあったことが示されている。同じ資料には、*хасак терге* という名称の車もあったことがのべられている。この名称は今でもモンゴル人の間に残っている。われわれはこの名称を1949年ケンテイ地方で記録することができた。この地方には、山地であるにもかかわらず、チンギスハンの時代に巨大な車があって、荷物の運搬だけでなく、モンゴル人の移動にも重要な役割を果たした。リュブリュキおよびプラノ・カルピニの記述によれ

ば、車の上にユルタをのせて移動した。これは不断の侵入と戦闘の条件下では、その特長を發揮したと考えられる。

敵から急速にのがれる必要のあるときには、ラクダその他の動物に荷物を積むよりも、雄牛をユルタつき車につけ、そこに家財道具をのせる方が速かったのである。

ユルタつき車の古いタイプは、今では失われた。われわれが一部のモンゴル人（ハルハ、ブリヤト、ウズムチンなど）の間で出会った二輪車は、中国人またはロシア人から借用したものであった。しかしモンゴル人の中での若干の観察は、一部の古い伝統が今日に残っていることを示している。例えば、共和国の東部では、棒と円い部分からなるユルタ上部の円錐形の部分が分解されることなく、棒と円い部分が固定されており、その結果、移動のときユルタの上部がまるまる二輪車の上ののせられるようになっていた。チョイバルサン・アイマクのウズムチンの間では、ケンテイ地方の一部のブリヤトの場合も同じであるが、衣服や装飾品などの品物が、住居内や長持にではなく、フェルトにおおわれたり、あるいは櫃状に板でかこわれたりした二輪車に納められていた。

かつてプラソ・カルピには指摘している。「彼らが自分たちの宝物を納める二輪車は、門によっても、錠前によっても閉じられていない」。

もう一つ、われわれがモンゴルの東部でのみ出会ったディテールを紹介しよう。すでにのべたように、モンゴルの現代の荷車の車輪には軸受函がない。チンギスハン時

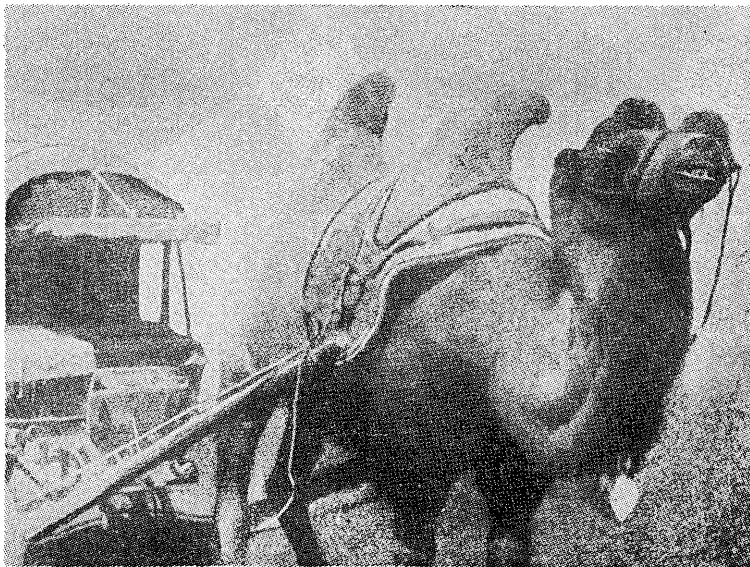


写真3 二輪車をひくラクダ

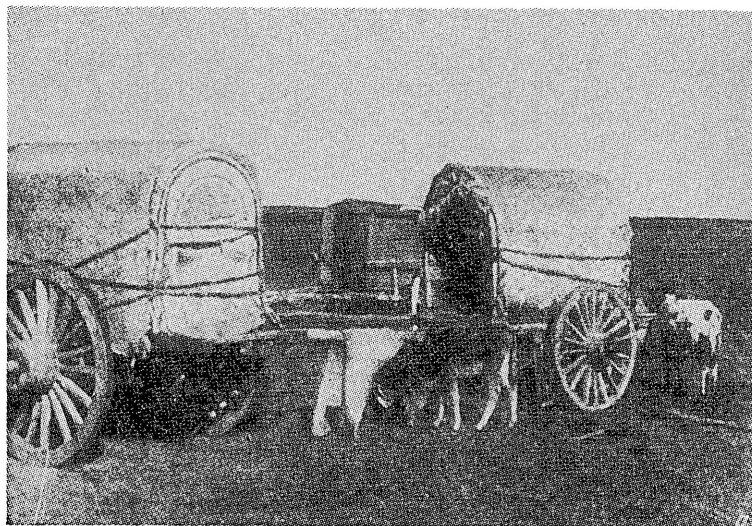


写真4 ウズムチンの二輪車

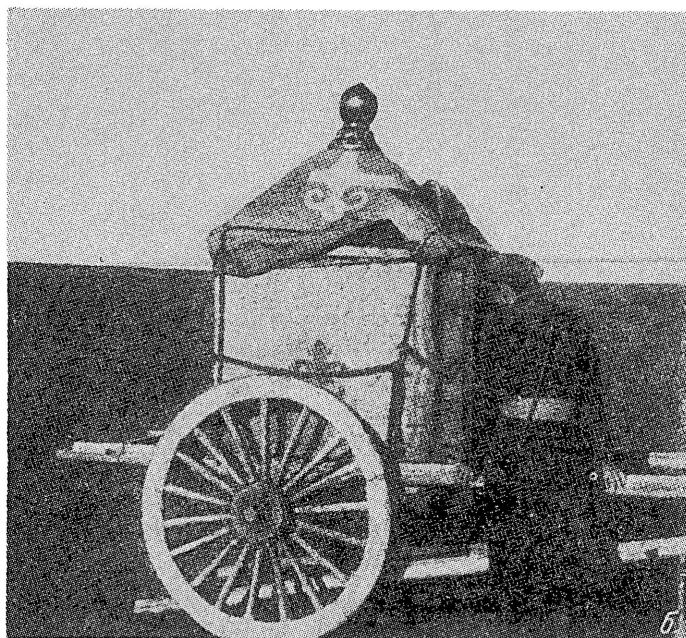


写真5 チングスハン時代の聖物を納めたウズムチンの小さなゲル

代のモンゴルの荷車にはそれがあった。これは、S. キセリョフによるモンゴルの古い都ハラホリン（カラコルム）の考古学的発掘によって裏づけられている。ハラホリン発見のツン（*цун*）に似た形のツンを、われわれはケルレン川およびオノン川の流

域（ほとんど消滅してはいるが、チングスハンに関連のある歴史的地域）で見出すことができた。われわれは、チョイバルサン アイマクのウズムチンの間でも見つけたが、それはもはや荷車の上ではなく、タガンの脚につり下げた護符としてであった。

### 家内的な獣毛製品と皮革の加工

農村地域では、家内的な方法によるフェルトの生産と皮革の加工がなされている。フェルトは羊毛からつくられる。それはユルタの覆い、ユルタの床敷き、寝台の敷物、鞍褥、冬用の靴下、塩入れのさまざまな袋その他に用いられる。

フェルトづくりの熟練した職人は、柔かくて丈夫な、たいへん薄い白いフェルトをつくる。フェルトをつくるには、まず毛をていねいに選別し、それをたたき、正しく並べ、同じ力で転がすことが要求される。

フェルトづくりの第一段階は、まず毛をていねいにたたくことである。そのため毛を皮また天幕の上にひろげ、棒または細い小枝でたたく。これに従事するのは多くの場合、女性、老人、子でもである。一部の地域、例えばツェツェルリクの協同組合やモンゴ・モリト・ソモンでは、弓で毛をたたいているのを見た。第二段階は、毛を古いフェルトまたは皮の上にならべ、それを水で湿らせ、木製ローラーに巻いて、平らな野原を転がすのである。

われわれはハルハ（ジャルガランハン ソモンの）におけるフェルトづくりを観察したので、それを記述してみよう。彼らは学校用のフェルトを男女のグループが転がしているところであった。

古い、広いフェルトの上に羊毛をひろげならべ、たっぷり水で湿らせ、その上からさらに毛を敷きつめた。これを3度くり返し、その全部の層を木製ローラーに巻きつけた。ローラーは皮で包まれ、紐できつく締められた。転がすために、ローラーの中央部は長い縄でしばられ、その端末は互いに向かい合った2人の騎乗者の手ににぎられた。こうして彼らが、交互に縄をひっぱると、フェルトの巻物は一方から他方へ転がった。騎乗者は、習慣として雄馬に乗った。

敷いた毛をローラーに巻きつけるとき、その下端が突出するときには、「トブルー、トブルー」と叫んだ。これは羊がたくさん仔を生む前兆とみなされた。巻物を縄で巻きつけるときには「ウメイ、ウメイ」と叫んだ。出来上がったフェルトをひろげるときには、「りっぱな娘が生まれた」とみんなが言った。新たにつくられたフェルトはミレフ *милех* とよばれた。われわれはここで、フェルトを転がすとき、端末が突出すれば、このフェルトの持主に子どもが生れる前兆であるときかされた。

毛からは、フェルトのほか、糸と縄がつくられる。糸を紡ぐには、主としてラクダの毛が用いられる。女性は紡車なしで糸を紡ぐが、ふつう左手で毛の束、右手で紡錘をにぎる。紡錘の轆車はまるい木でできている。ときには石が用いられることもある。毛糸はシューバを縫ったり、フェルト製品に縫い目を入れたりするのに用いられる。この種のフェルト製品としては、坐るための敷物、扉にかぶせるフェルトなどがある。

よく広まっている家内の産物の一つに、毛皮と革の加工がある。毛皮からはシューバ、革からは履物、鞍褥、発酵乳やクムイスの容器がつくられる。

デルベトの場合、羊皮の家内の加工法はつぎの通り。まず生の羊皮を水とフジル（ソーダ）でひたし、たたんでユルタの中におく。翌日羊皮をけずり（*маазна*）、再び同じようにたたむ。1日おいてから搔器でけずった後、棒（*эдронг*）でもみ、乾かし、ボズ *боз*（酸乳からアルヒを蒸溜した後に残る凝乳に似たもの）をぬり、再びたたみ、ユルタの中に10日間ほど放置する。この間、何度か羊皮を外に出してけずる。最後の日、ボザイン・シャラ・ウス *бозаин шара ус*（酸乳またはクムイスからアルヒを蒸溜した後に残る液体）にひたし、日に乾かす。それから草の上に毛を上にしてひろげ、1夜の間そのままにするか、あるいは、わずかに水で湿めらす（容易にもめるように）。

羊皮をぎざぎざになった棒（*эдронг*）で、それが乾いて柔くなるまでなめす。小さな穴を掘り、そのそばで馬糞を燃やす。火のついた馬糞をその穴に移し、その上から獣糞用の籠（*араг*）をかぶせるか、あるいは木で円錐状の骨組をつくり、その上から



写真6 羊毛を刈り取るミンガト(族)。コブド アイマク

毛を外側にして羊皮をかぶせる。さらにその上から、煙が外に出ないようにフェルトをすっぽりかぶせ、羊皮が黄いろくなるまで煙でいぶす。熱い羊皮にボズの塊をぬり、きっちりたんでユルタの中におく。2～3日後、ボズイン シャラ ウスの液でひたし、再びたんでおく。これを数回くり返して乾かす。ある暑い日に羊皮を草の上に毛を上にしてひろげ、水をかけながら子どもに踏ませる。それから鉄のシャベルで皮から水分をけずりとる。羊皮がきれいになるまでこれを数回くり返す。それからもう一度ボズイン シャラ ウスの液で湿らせ、もむ。これで羊皮は完成したとされる。

共和国の東部で出合ったブリヤトでは、いくつかの種類の皮なめし器 (*эригулгэ*) がみられた。これは革命前のザバイカル地方のブリヤトにあったものと同じであった。大型有角畜〔牛〕と馬の皮を加工するには二つの異なった皮なめし具がある。その一つは、垂直の軸が立てられ、それに2本のくり抜かれた丸太が寄せて立てられる。くり抜き丸太にはさまった軸に皮が巻かれ2本のくり抜き丸太がいっしょにしばられ、くり抜き丸太の間の穴にさしこまれた長い棹を利用して軸のまわりを回転させる。この回転のとき皮はなめされるのである。

もう一つの皮なめし器は、2枚の平行した動かない板からなる。この板は互いに上下におかれ、8本または4本の棒 (*шopo*) および4本の柱でつながれている。これら全部が、地面に掘られた木の軸 (*цере*) のまわりをまわる。軸の中央に穴があり、軸のまわりを回転する皮がそれに通されている。

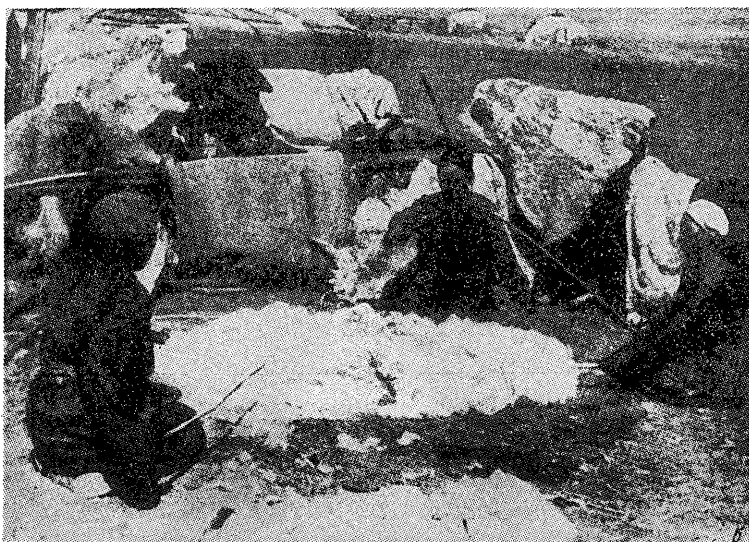


写真7 フェルト用の毛をたたく (ミンガト)



2本の柱の中央部に長い棒が固定され、皮なめし器はそれを利用して、人間または動物（馬や牛）の力で動かされる。動物を利用する場合には棒の外側の端末に挽索がとるつけられ、これが軛<sup>くびき</sup>または鞍と結びつけられる。



写真8 ブリヤトにおける羊皮の加工

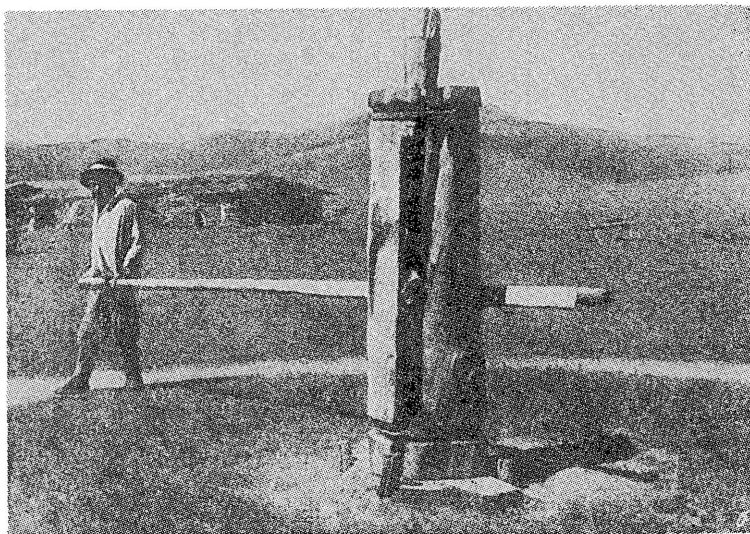


写真9 ブリヤトの皮なめし具

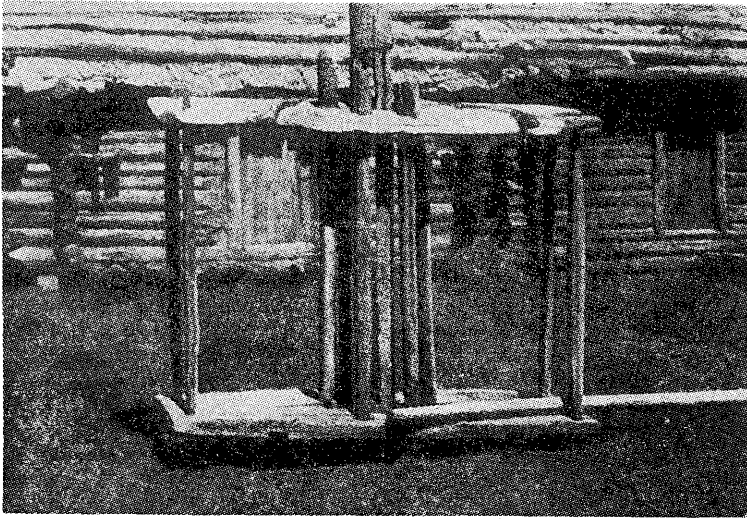


写真10 ブリヤトの皮なめし具

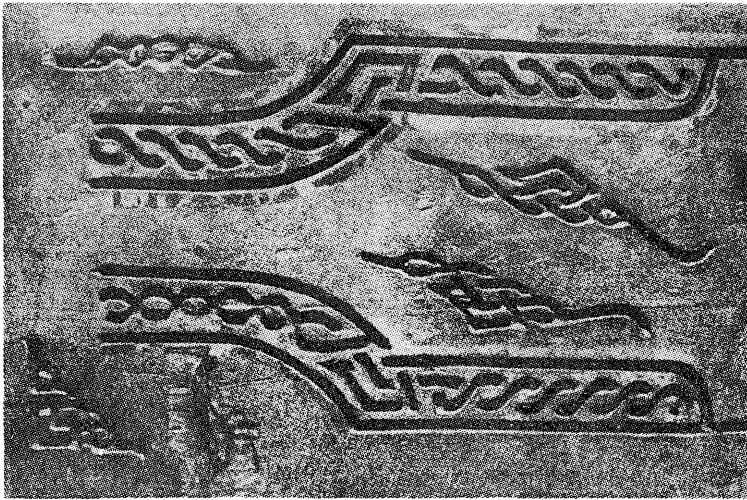


写真11 皮に文様をつけるための型板

ブリヤトの場合、羊皮をなめすために、肝臓をすりつぶしたものや発酵した乳をぬり、垂直の杭に毛のない側を外にして巻きつけ、搔器 (*хидерген*) で皮の内側膜をけずりとるのである。

## 住 居

牧畜に従事するモンゴル住民の住居は、フェルトのユルタ *юрт* [モンゴル語でゲル]

である。それは遊牧的生活形態にたいへんよく適合したものである。軽くて丈夫である上、急速に解体したり組立てたりできるところに、ユルタの特徴がある。各家族は自らのユルタをもっている。息子の結婚と同時に必ず独立のユルタがあたえられる。しかし独立したユルタは、新婚夫婦が婿の父親の経営から独立することを意味するものではない。

モンゴル語での、ユルタを意味するゲル (*гэр*) から派生した言葉が興味深い。すなわち「結婚する」はゲルレフ (*гэрлэх*)、「妻のある」はゲルギーテン (*гэргийтэн*)、「既婚女性、妻」はゲルギー (*гэргий*) である。

モンゴルの古い風習によって、以前、ユルタは必ず婿の父親によって用意され、中に入れる家具、つまり寝台、長持、坐るための敷物、容器などは嫁の両親によって用意された。ふつう結婚した息子たちは、父親と同じ宿营地 (*айул*) に住んだ。他の親族もしばしばこれに合流して、1宿营地あたり5~10のユルタが共和国の遊牧民によく見られる現象であった。革命後、家畜放牧のための労働力を結集する目的で、同じ遊牧集団に親族でない人も加わるようになっている。

封建期のモンゴルでは、宿营地内部でのユルタの配置にも一定の秩序がみられた。年長で名門、そして最も富裕な人々は宿营地の南西部にユルタを建てた。息子はそのユルタを父親の前に建てることはできず、貧しい人々は必ずみんなのいちばん後方に建てた。

われわれの観察によれば、こうした古い伝統は今日でも、共同で家畜を放牧している協同組合 *ХОТОН* にも部分的に残っていた。例えば、最も家畜の多い家族はホトンの南西隅、最も家畜数の少ない家族は南東隅をしめた。

むかしのモンゴルでは、ユルタの数が数百数千に達する宿营地がみられた。例えば、長春真人の旅行記によれば、大オギン (チンギスハンの末弟テムゲ・オッチギン) の宿营地では黒い車とフェルトのユルタが列をなして数千を数えた。またチンギスハンのある妃の住地には、車とユルタが、昔の匈奴の単干にもみられないほどの壮観を呈していた。格子つきのフェルトのユルタが円錐形の仮小屋 *шалаша* から発展したことは、例えば N. ハルージンの研究によっても明らかにされている。

むかしのモンゴル獵師は、『モンゴル秘史』およびペルシアの史家ラシッド・アディンによれば、白樺樹皮でおおわれた円錐形の仮小屋とフェルトのユルタに住んだ。フェルトにおおわれた円錐形の住居 (*обохой*) はモンゴル人民共和国でも残っている。しかしそれは、今では不断に住む住居としてではなく、生活用具の保有用として利用されていた (われわれはこれを西部地域で観察した)。それを最もよく利用するのは、

寒い時期における牧夫とキャラバンの案内人であった。

13世紀に広くみられた古いフェルトのユルタは、当時のヨーロッパ人旅行家リュブリュキとプラノ・カルピニによってくわしく記述されている。むかしのユルタは、今のユルタとはちがって、ストーブの煙突のような細い頸が上についていた。探検家ポターニンはオールドスで上部に細い頸のついたユルタの写真をとることに成功した。これはエジイン ホロ *ежиин хоро*、つまりチンギスハンの妻の宝物を納めたユルタとよばれた。

古代モンゴルの後裔と言われ、アフガニスタンとソ連のトルクメン共和国（少数）に住むハザラの間に、古代モンゴルのものに近いタイプのユルタが残っていた。ハナン ヒルガ *ханан хырга* とよばれるこの種のユルタがソ連科学アカデミー人類学・民族学博物館に保有され、ガッフェルベルグによって記述されている。

ここで、われわれがウズムチンの間で見た二輪車のことを紹介しておこう。車上には、まるいのではなく、四角なフェルトの小ユルタがのせられてあったが、その先端には黄金の球がついていた。これは部族の「聖物」で、これの保管者である老ウズムチンの説明によれば、その中にはチンギスハンに属するとされる遺物が入っている、とのことであった。

この小ユルタ内の品物は、われわれは一べつできただけであるが、若干の布切れ、旗の一部（清朝のものであった）、仏教関係のものなどであった。一部の品物が実際に13世紀のものであるかどうかは判断できなかった。というのは、われわれはそれをひと目見ただけだからである。これを他人に見せたり、その天幕に近づいたりすることは冒瀆と考えられていた。この「聖物」は30世代にわたって「ブリヤト」族によって保存されてきた。これがラマではなく、氏族の代表者の手にあることが注目される。

1945年、ウズムチンは北部中国（内モンゴル）から部族全員で、先頭にこの小ユルタをたててモンゴル人民共和国に移住したのである。

われわれはここで、ユルタ（この場合は聖物として）を二輪車の上にのせることの古い伝統を検証することができる。その頂点に球をつけるのは、上部に細い頸をつけたむかしのユルタのタイプを反映しているかも知れない。

現代のフェルト製ユルタの骨組は、木製の折りたたみ式の格子からなる。これは東部モンゴルでハナ *хана*、西部でテレム *терем* とよばれる。格子はまるく立てる。ユルタの大きさは格子の枚数によっており、4つから12までである。格子には円錐形の屋根が固定される。この屋根は細い棒（*уни*）からなり、一端は格子の上に、他端は、

木製の天井まる窓（同時に煙出し穴の役割も果している）にもたせかけられている。

ユルタを建てるには、はじめ格子状の壁をたて、ついで誰かがユルタの中央に立って、棒で天井まる窓を支える。あとの人々、主として女性たちは棒 *уни* を天井まる窓と格子に固定する。天井まる窓は、格子状の壁もそうであるが、モンゴルの間でいろいろな名称をもっている。東部ではトン *тон*、西部ではハラアチ *хараачи* とよばれる。天井まる窓には互いに交叉する十字形の材が円周の材の面よりも高くもりあがるように固定されている。この場合の十字材の構造には部族によっていくらかのバリエーションがみられる。円錐形の屋根を形づくる棒 (*уни*) は、モンゴル人民共和国西部のカザフにみられるように、チュルク族のユルタのそれとは異なっている。カザフのものは、モンゴルのウニ *уни* とはちがって、曲げられた形をしており、これによってカザフのユルタにまるい形をあたえている。これは一見してわかる特徴である。扉の構造もちがう。モンゴルのユルタには、ふつう南向き（ハルハ・モンゴルの場合）および南東向き（オイラトの場合）の2枚開きの木扉がついている。また、モ

表2 ユルタの基本部分の名称

名 称 названия	ハルハ Халха	デルベト дэрбэты	バイト Баиты
Решетка юрты ユルタの格子	<i>хана</i>	<i>терем</i>	<i>терем</i>
Палки конической части юрты ユルタの円錐形部分の棒	<i>уни</i>	<i>уни</i>	<i>уни</i>
Круг для дымохода 煙出し用のまる窓	<i>тоно</i>	<i>хараачи</i>	<i>хараачи</i>
Войлок, покрывающий круг юрты 天井まる窓をおおうフェルト	<i>өрхө</i>	<i>өркө</i>	<i>өркө</i>
Войлок на конической части юрты ユルタの円錐形部分のフェルト	<i>девер</i>	<i>девер</i>	<i>девер</i>
Войлок на вертикальной стенке юрты ユルタの垂直壁面のフェルト	<i>туурга</i>	<i>тууруг</i>	<i>тууруг</i>
Беревка на юрте снаружи ユルタ外側の縄	<i>бөслур</i>	<i>бос</i>	<i>бос</i>
дверь деревянная 木 扉	<i>халга</i>	<i>хагул</i>	—
дверь войлочная フェルトの扉	<i>үүдэ</i>	<i>үүден</i>	<i>үүдэн</i>
Порог しきい	<i>босого</i>	<i>алхад</i>	<i>алхад</i>
Перекрест у круга юрты 天井まる窓の十字材	<i>даага</i>	<i>чамхарай</i>	<i>хуургал</i>

ンゴルの場合、木扉の上に縫い目をつけたフェルトがかぶせられる。チュルク族の場合は、窓掛のようにフェルトを上からたらしして扉をおおっている。モンゴルの扉はしばしば暗赤色に塗られる。ユルタの骨組の上から冬は2枚、夏は1枚のフェルトの覆いがかぶせられ、尾毛製の縄でしばりつけられる。夏期の覆いは、ふつう地面まで届かない。露出した格子から風がユルタ内にはいるようにするためである。冬はあたたかくするために、ユルタの下部に外側から、幅50cmほどの長いフェルト(*хаявч*)が巻きつけられる。

煙出しの天井まる窓の上に四角形のフェルトの覆いがとりつけられ、その末端に尾毛製の縄がつけられる。この覆い *өргө* によって、煙出し穴は夜間または雨のとき閉められる。昼間は、トンはふつう、全部閉じられることはない。天井まる窓のこの部分は明り通りの役目も果している。

東部と西部のモンゴルでは、ユルタの構造は同じであるが、しかしユルタに関連する若干のターミノロジーには相違がみられる。ユルタの基本部分の名称は表2の通りである。

ユルタ内部の状態についてみれば、ふつう中央に炉があり、煙はフェルトでおおわれていない天井まる窓を通して外へ出る。入口の右側(東側)は女性用部分とされている。そこに食器を納める棚や箱、食糧の箱、背の低い、しばしば文様のある木製の寝台、家財を入れた長持がおかれている。入口の正面が最も上座とされている。以前はここに、小さな机の上に仏像があったが、今では指導者の肖像やさまざまな飾りがおいてある。左側が男性用で、そこには支柱にクミスと発酵乳のための皮袋があり、鞍、馬具、狩猟用具などがおいてある。また寒いときには、この側に仔羊や仔牛がつかれた。

家具調度とユルタ内の状態について細かく記してみよう。すでにのべたように、入口の右側に容器をおく戸棚や棚がおかれた。容器は遊牧的生活条件に適応するように、丈夫で持運びに便利でなければならない。さまざまな大きさの木桶もその一つである。持運びに好都合なように尾毛でつくられた弧状の縄がつけられている。こうした小桶は主として搾乳用である。乳用の容器を他の目的に使うことは、古来の伝統によって禁ぜられている。水の容器としては、断面が楕円形の背の高い木桶が用いられる。側面に木製の耳がつけられ、その穴に縄が通される。この縄を利用して、桶を鞍に結びつけたり、背にかついだりした。このほかの木器として、いろいろな大きさの槽、煮た肉のための木皿、茶釜、上端を切った円錐状の形をし、数カ所に金属製のたがのかかっている容器(*домбо*)がある。釜で沸かされた茶はこの容器にうつされる。飲用

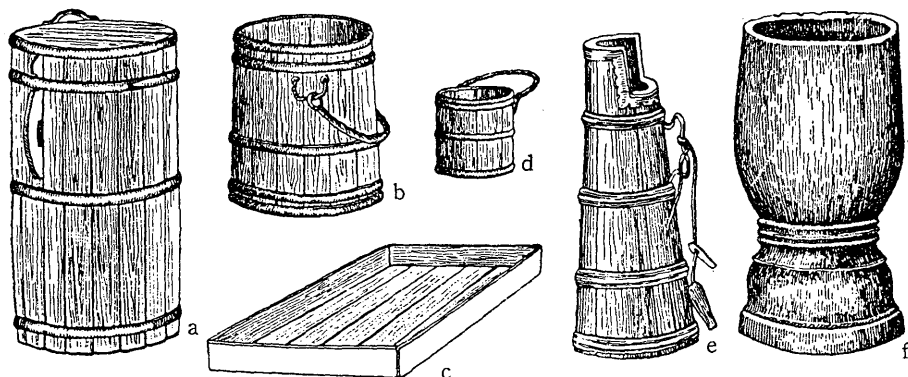


図3 ハルハの木製容器

a—桶 b—バケツ c—凝乳乾燥用の木枠 d—乳桶  
e—茶の容器 f—木臼

の煉瓦茶は細かく切られるか、あるいは木臼 (*yp*) でつぶされる。木臼は丸太から切りとられる。釜の下敷きも木でつくられる。

茶を飲むのに使われる木碗の内側には、ときには銀の薄板が張られることもある。

バターの保存には動物の胃袋と太い腸が利用される。この種の「容器」はきわめて古く、アジアだけでなく、他の諸国の多くの民族にみられるものである。穀物や穀粉の貯蔵には仔牛、仔羊、あるいは仔馬からまるごと剥ぎとった皮袋が用いられる。クム

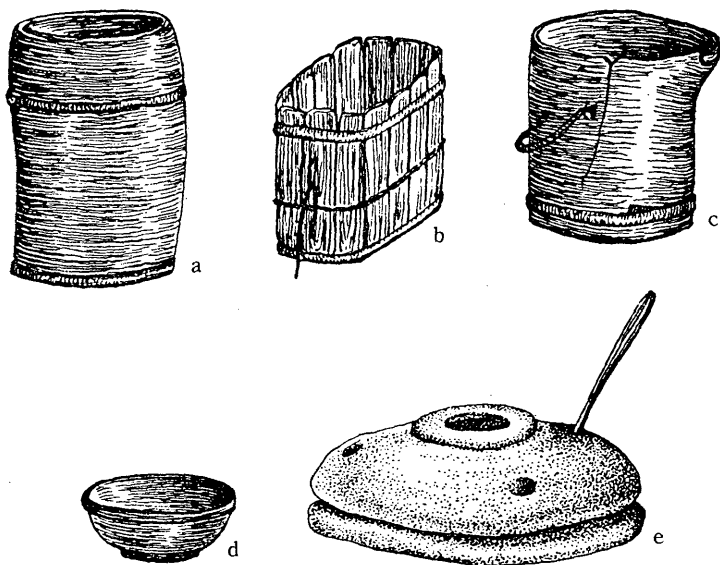


図4 デルベトの木製容器

a—木臼 b—水桶 c—乳桶 d—碗 e—石製の穀擦器

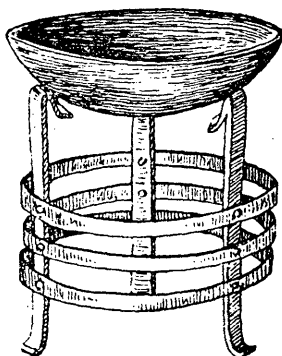


図5 タガンと鍋

イスといろいろな発酵乳は、ハルハではフル *xyxyp*, オイラトではアルハド *архад* とよばれる背の高い皮の容器に保存される。それはユルタの左半分におかれる。デルベトとバイトで、われわれは、皮の容器が左（男性）側ではなくて、以前仏像のおかれた入口正面の小机の前におかれている例に出会った。これは西部ブリヤトと類似している。彼らはフルンガを入れた容器を、住居の北側の柱のそば、上座においた。

モンゴルの生活では、以上のほかに、金属製のバケツ、ひしゃく、釜、たらい、やかん、ときには陶器の茶碗など、ロシアや中国製の容器もみられる。オイラトの農耕民には、炒った穀物をつぶすための石臼がみられる。こうした石臼は現地の職人の手でつくられる。

各戸の必需品として鑄物のトゴ *того*（球状の釜）がある。それはタガン *таган*, または近年鉄製ストーブの出現とともにストーブのまるい穴にかけられる。こうした釜で肉を煮、茶を沸かし、長い柄のついたひしゃくで容器 (*домбо*) に汲み入れられる。釜はふつう、ヤクの毛でつくった箒できれいにする。

鉄製ストーブのないところでは、炉の上にタガン *таган* (*тулаз*) をおく。これは鉄のたがを釘で固定した3~4本の鉄製脚からなっている。脚の下端は、安定のためにいくらか外側に曲げられ、上端は、釜をおくのにより便利のように内側に曲げられている。オイラトでは、鉄製タガンの代わりに、場所によっては、高さ30~40cmほどの半円形の粘土壁 (*зүүх*) がみられた。この円周はまるまる閉ざされてはいなかった。タガンの内側に鉄のはさみを利用してアルガン *аргал*（乾燥した牛馬の糞）をおいた。ふつうアルガルを入れた籠は食器棚と炉の間におかれるが、ときにはアルガルは炉の前の床上にそのまま積まれることもあった。

アルガルが好まれているのは、多くの地域で薪がないためだけでなく、アルガルの煙がそれほど目鼻を刺戟しないからでもある。アルガルは炉の中でタガン内側の内周に沿って配置される。そうしないとよく燃えない。

以前、ストーブがないときには、ユルタの中はいつも煙で充満していた。

すでにのべたように、入口の右側（女性用）に主婦の寝台がおかれる。しかし、ときには左側におかれることもある。しかしそこ（左側）には尊敬する来客、または家族の年長者が休む。残りの家族は、炉のまわりのフェルトの敷物の上でくつろぐ。

寝台 (*орон*) は高さ30~40cmの分解できる枠で、その上に板が敷かれる。寝台の



正面はつねに色が塗られ、幾何学文様が描かれている。文様の中でしばしばみられるのはオルジー *ользий* (幸せの糸) の絵である。

寝台にはフェルトの敷物がおかれる。枕は、毛をつめて布地またはフェルトで包んだものである。枕の壁側の端末はまるく、その反対側の端末は四角形（これは枕の中に入れた板によって形づくられる）になっている。四角形の端末は綿ビロードまたはその他の布地で縫われている。布地には金属製の飾板がとりつけられる。われわれは中国から移ってきたウズムチンの間で、飾板の代わりに、龍の描かれた大きな金属板のついているのを見た。これは中国の影響と思われた。

アラトは、毛皮の代わりに、しばしば自分の上衣を上にかける。今では、都市その他の定住地のユルタでは鉄製寝台、工場製の毛布、覆いなどが広まっている。

ユルタの炉のまわりの床には、ラクダの毛糸で縫い目をつけたフェルトが敷かれる。これはシルデク *ширдэк* とよばれる。その二つ折りにした縁は、つねに炉の方に向けられる。シルデクの上に、しばしば動物の毛皮が敷かれる。寝台上のフェルト敷物には縫い目がつけられず、イシゲ *исигэ* または *ишигэ* [ふつうのフェルト] とよばれる。

寝台の前の床の上に、しばしば主人 (父 *эсэгэ*) が坐る。この側 [右] の彼のそばでは、主婦が家事にたずさわっている。彼女は食物をつくったり、ユルタの他の住人と話したりするが、ふつう自分の右足をひき、左足の膝によりかかって坐る。女性が男性のようにあぐらをかくことは、つつしみがないと考えられている。ユルタの主人以外の男性は、左側にくつろぐ。ここで彼らはあぐらをかいたり、左足を引きつけ右足をたてて体を支えたりしている。

ユルタのまわりには家畜用の囲い、仔牛をつなぐための縄のついた杭、乗用馬をつなぐ柱がある。東部および中央部の各地では二輪車がおかれている。すでにのべたように、西部モンゴルは移動のとき二輪車を利用していない。

むかしは、リュブリュキヤプラノ・カルピニの記述に見えるように、モンゴルのユルタは車上にたてられ、分解しないで移動した。こうした古い伝統の名残りが共和国の東部でまれにみられる。すなわち、ユルタの円錐形部分を形成する棒が分解されず、天井まる窓に固定されたまま二輪車に積まれたり、ラクダで運ばれたりしている。

フェルトのユルタがモンゴルの民族的建築の特徴をなし、ラマ寺院にのみみられるユルタ型建物の原形であったことを指摘する人がある。この問題についての資料は1926-1930年コンドラチエフ М. И. Кондратьевой によって集められた。われわれの調査班のルートでは、ラマ寺院の崩壊にともない、ユルタ状の建物はほとんどなかった。

ただ、ウブルハンガイ アイマクのルン・ソモン、ケンテイ アイマクのケンテイ ソモンで観察されただけである。

東部地域で出会ったブリヤトとハムニガンの間では、冬期はモンゴルのフェルトのユルタ、夏期には木造建物に住んでいる。この木造建物は夏期の宿営地に残されたり、冬の宿営地に移されたりしている。

夏の住居は2斜面の屋根のある方形の板の建物で、屋根の中央に煙突を出すための穴があげられている。この穴が唯一の明り通りの役割を果たしている。建物の扉はユルタと同様に南向きになっている。またモンゴルのユルタと同じように、東側（右）は女性、西側（左）は男性の部分とされている。夏期および冬期の住居における家財道具の配置はモンゴルのユルタの場合と同じである。ブリヤトの住居の特徴として、ロシア風のパンを焼いたり、さまざまな焼菓子をつくるための粘土かまどがあげられる。ブリヤトは革命前ロシアから移住し、ロシア人の影響によって身につけた生活習慣を保持しているのである。彼らはパンを焼き、乾草を用意し、乳を加工するための分離器をもち、またしばしばロシア風の衣服を着、革命前ザバイカル地方のブリヤトに広まっていたタイプの木造建築を保存し、そして同時にモンゴル式のフェルトのユルタにも住んでいる。

革命後、モンゴルの遊牧用ユルタはいくつかの変化をこうむった。とくに内部の状態がそうである。以前は煙る炉が暖かさと照明の主要な源泉であり、鉄製のストーブはごくまれで、富裕な人々の持物であったが、今ではストーブのないユルタはまれである。ときにはストーブとともにタガンもみられるが、しかしこれは多くの場合、同時に数種類の食物を用意する必要に基づくものである。

都市やアイマク、ソモンの中心地では、ユルタの中に移動できる木製床をつくり、そこにじゅうたんを壁にかけたり敷いたりしている。また低い木製寝台の代わりに鉄製寝台をおき、工場製の毛布でそれをおおっている。都市のユルタではしばしば電灯とラジオがついている。

農村では、遊牧的生活のもとで最も現地の条件にあうのはユルタであるが、都市やアイマク、ソモンの中心地では、部屋数の多い木造住宅が普及している。

学校、集会場は原則として新しい建物におさまっている。家を建てるには丸太を垂直に立て、壁は外側から木ずりを格子状にうちつけ、その上から藁のまじった粘土を塗りこむ。新しい建物の内側は、主として中国人から借用した古い様式と著しく異なっている。以前はガラスの代わりに紙が窓に張られ、部屋の中では板床(ханжин)が広い場所を占めていたが、今ではいたるところガラスの窓で、テーブルや椅子がお

かれている。公共施設では、テーブルにはしばしばラシャ地がかけられ、壁には壁紙が張られている。ときにはペンキまたは石灰で塗られていることもある。壁には指導者のチョイバルサンやスーヘ・バートル、あるいはモンゴル人革命党の中央委員の肖像がかかっている。レーニンやその他ソ連の指導者たちの肖像もときどきみられる。

家々には電話、ラジオが現われ、電灯もつきはじめている。

## 衣 服

モンゴル人の衣服は革命以後本質的に変化したけれども、しかし基本においては民族的特徴を残している。西部のアイマクの農村住民であるオイラトは、まだ古い型式の民族服を用いているが、東部のアイマクのハルハ・モンゴルでは大きな変化が見られる。とくに女性の衣服と髪形がそうである。1940-1942年代には、革命前の独特のハルハ女性の衣服および、これにともなう「翼のような」髪形をときおり見ることができるが、今では全く消滅してしまっている。

この女性の上着はハラート (*тэрлэг*) [長い上着] とこの上に着る袖なし (*уджи*) からなりたっていた。このハラートの袖は特徴がある。形は肩の位置に高いふくらみをつけ、袖口には漏斗状のカフスをつけた大変長い袖である<sup>4)</sup>。また袖の中間部分には身頃とは異なる別の色柄の布 (綿、ビロード、金襴、絹) を用いている。その他、色糸刺繍を施した幅のせまい飾り布を用いていた。この飾り布を低めのスタンドカラー、左前端 (右身頃に左身頃を重ね合せ、脇の下に2個のボタンをかける)、裾 (左脇下部分にスリットを入れている)、さらにウエストの位置にギャザーをとり、この部分にもこの飾り布をつけ、華やかさをそえている。ハラートは袷仕立てである。布地は以前、富裕な女性は絹、貧民はダレムバ далемба、ツェムバ цуемба など中国製木綿が用いられた。

着丈の長い袖なし (*уджи*) はチョッキ (*цедж*) にスカート (*уджин хормос*) (背中心はウエストの位置までスリットがあいている) を縫いつけている。袖なしは前開きで、数個のボタンをかけている。チョッキの前身頃のウエストの位置に、四角形の飾り板がつけられ、両側面にはハンカチを結びつけるための紐のついた飾板 *ташияный билъ* がついている。

4) モンゴルのハラートの長い裾と長い袖は、民衆生活では調法に利用されることもあった。「長い裾を捲り上げては肉や牛糞を持ち運ぶ風呂敷の代用となし、腕よりも遙かに長い折返し袖は食器を拭く布巾にも、顔を洗うときの手拭の代りにもなるのである」[江上編 1941: 288]。長い袖が手袋の代用になることは勿論である。

長いウジ *уджи* の代わりに、ときにはチョッキだけの短い袖なしを着ることもある。

むかしは、モンゴルの既婚女性は帯を締めなかった。モンゴル語には、女性を表現する言葉にブスグイ *бусгүй* [帯を締めない人]<sup>5)</sup>、男性を表わす言葉にブステイ *бустэй* [帯を締めた人] (*бус* は帯) がある。今ではモンゴルの女性はみんな帯を締めている。

これに関連して、モンゴルの諸民族の間に帯と帽子にたいして特別の関係があったことを指摘しておこう。例えば『モンゴル秘史』の中に、メルキト族がテムジンを殺そうとして、その宿営地を襲ったとき、テムジンはブルハン・ハルドゥンの山にかくれた。危険が去った後、テムジンは、ブルハン・ハルドゥンが彼を救ってくれたことにたいする感謝のしるしに、犠牲を献げた。そこでは、シャマンのケク・チュウがテムジンにたいし、彼の兄弟ハサルの側から加えられるかも知れない危険を警告したとき、チンギスはハサルから自由を剥奪する意味で、帽子と帯をはぎとったことになっている。

モンゴルは義兄弟 (*анда*) の契りを結ぶとき、互いに帯を交換した。ブリヤトでは、帯を締めたシャマンはザヤン *заян* (霊) を招くことができないとされた。

髪形について言えば、モンゴルの女性は誰でも、結婚後髪を2本に編み、これを細長い袋 (ヒロードまたは綿ヒロードが多かった) に入れた。髪形の上に装飾として銀または他の金属製の飾りをつけた。多くの探検家たちがモンゴル女性の衣服、髪形について書いたものによると、これらはモンゴル諸部族を区別する特徴であると考えているが、しかし女性の衣服、髪形、かぶりものをよく分析してみると、変るのは二義的な部分や装飾のディテール、髪の編み方その他だけで、基本的要素は同じであるとわれわれは考える。これについては後にふれよう。

ハルハ・モンゴルの女性のことに帰ろう。彼女たちの古い髪形は、こめかみの髪をにかわ膠づけする方法によって、とくに堂々とした風格を示している。

結髪方法は、額の中心で左右に分ける。こめかみの両側面から翼のように折り曲げ、先端は三つ組に編む。翼の部分は平にして膠でにかわ固める。膠の乾くまで竹製の板をあてて行動し、膠が乾燥すると、竹製の板を銀か金属製のものに取りかえる。三つ編みの部分は、袋に収める。さらに銀または金属製の冠をかぶった。冠は、宝石で飾られ、また頬の方に様々な垂飾りのついた鎖が下げられた。東部ハルハの冠と西部ハルハ

5) 江上波夫は内モンゴルの調査記録において同じことを指摘している。「婦人の衣服も男子のそれと大差ないが、既婚の女は時に上衣の上にチョッキのような短衣スーツを着て、帯を締めないことがある。従って“帯無き人”と謂へば人妻の意である」[江上編 1941: 288]。

(ウリヤスタイ)のその異なる点は、前者において後頭部に薄板のないことである。冠の上に、先端の尖った帽子 (*мангай*) をかぶった。この帽子にビロードまたは綿ビロードの折り返しがつけられ、また後方にリボン (*дзалга*) についていた。

富裕な女性 (領主の妻たち) の頭飾は、以前、銀数千両分に相当した。

ハルハの女性が、以上のべたような髪形や衣服を身につけるのは結婚後である。髪形と衣服は相互に関連している。女性がなにかの理由で1本の編 (弁) 髪に結ったときには、未婚女性のハラートを着なければならなかった<sup>4</sup>。

現在では、ハルハの女性は「翼形」の髪形の代わりに、1本または2本の編髪に結ったり、短く断髪したりしている。都会の女性は、ソ連と同じように、さまざまな現代風の髪形にしている。かぶりものとしては、今ではネッカチーフが用いられている。またフェルトや柔毛製のベレー帽、フェルトの男子帽、男子用の庇つき帽子も女性の間に広まっている。祝日には、流行の先端をいくヨーロッパ風の帽子をかぶる女性もみられる。

今では、ハルハの女性はすべて、未婚女性用ハラート (男物も同じ) を着て、幅広い帯またはバンドを締めている。

モンゴルの娘たちの衣服の裁断法はつねに男子のものと同じであった。彼女たちは三つ組を1本編み、その髪の中に絹の房や飾板などを編みこんだ。

ハルハ・モンゴルの伝統的な男子服の上衣はハラート (*дель*) で、右側でボタンをかけた。袖は別袖をつけず、身頃を続けて裁った。ハラートには色無地の幅広い帯を締めたが、これはときには、長さ 7~8m に達し、おしゃれの対象となった。ハラートはたいへん長くつくられ、帯の上の前後にふくらみ *напуск* をつけた。これはふところの中にいろいろな品物を入れるため、右手をつつこんでその品物を容易にとり出すことができる。袖は以前たいへん長く、肘のところまでひだに集められ、袖口には綿ビロードまたはビロードの折返し (*нудрага*) が縫いつけられた。今では折返しはもはやつけられず、袖全体が短くつくられている。袖や襟、左裾の縁には、色糸刺繍で飾った幅のせまい布をつけた。夏用のハラートには布地の裏をつけ、冬用のハラートには、仔羊の毛皮が用いられた。冬用の衣服は、よく加工された羊の皮で縫われた。

男子は帯に、紐または鎖につけたナイフと発火用具などを下げた。これは鉄片、燧石、ほくちのセットと、鞘におさめたナイフと骨製箸のセットからなっている。箸は

4. モンゴル革命の前、ウルガの娼婦たちは既婚女性の衣服を着る可能性を得ようとして、仮空の結婚式をあげた。このためにラムがよばれ、友人、知人たちの臨席のもとに、結婚式のときに必要とされる祈禱をあげ、仏に供物を献げた。

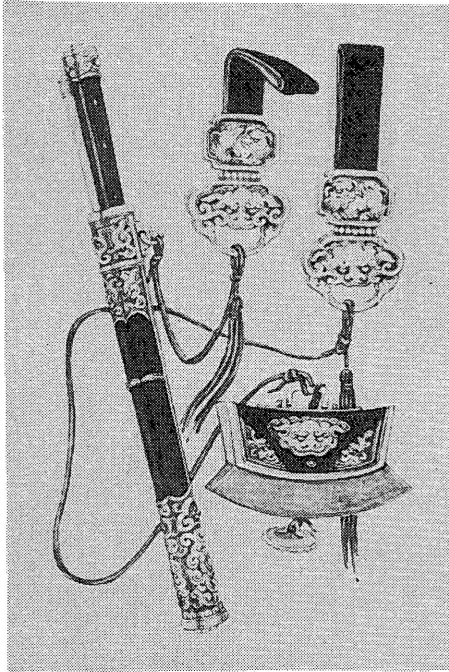


図6 男子用のナイフと発火用具

肉の小切れ、米などを食べる時用いる。また帯には煙管とタバコがさしこまれる。以前は嗅ぎタバコ入れの袋も帯につけていた。嗅ぎタバコは人に出会ったり、挨拶を交したりする時にすすめたものである。

雨の日、男子は雨外被を着た。これは必ず赤いラシャ地で作られ、前後ともウエストの位置から裾まで切れている。襟、裾、袖の縁は黄いろい紐で縁どりされている。頭には頭巾(юбан)をかぶる。

下着は男性も女性も同じである。それは短いシャツとズボンからなる。シャツはまっ直な布地で作る。まず横に折り、両側に袖がつけられる。袖は手首のところで狭くなっており、両脇

にはまちが入れられたり、切れ目が入れられたりする。シャツには低い襟がつき、襟もとと右脇ボタンで止めている。襟と袖の縁には色の布地でふちどりをすることもある。シャツはズボンの上に着る。

ズボンは、長い方の糸に沿って織られた2枚の布地で作る(一方の端はわずかに斜めになっている)。股の間に、横に折ったまっすぐな布地をさしこみ、上端には紐通しのために幅広い布が縫いつけてある。現在、モンゴル人は商店でロシア風の下着を購入している。

履物は、つま先が上方に曲っている長靴(эмыялы)である。共和国の東部地域に住むバルガ・ブリヤトおよびウズムチンの場合は、つま先がとがっていない。靴底は数段に縫い合わされたフェルトと、その下皮からなっている。前革と踵の上の部分は、染色した皮でアプリーケをして飾っていることが多い。アプリーケを作るにはふつう、文様を刻みこんだ板(хэб)をつかっている。板にぬらした皮をあて、ナイフの刃の裏側で、図文の切込みに合わせて皮をたたくのである。皮が乾いた後、突出した図文の線に沿って細い錐で穴をあけ、この穴によってアプリーケを靴に縫いつける。

今ではウランバートルにロシア式の長靴と女性用の靴の工場があり、フェルトの靴

も協同組合でつくられている。

長靴は、フェルトの長靴下の上からはく。長靴下の上端は色のついた布地で飾られ、長靴の胴の上に出るようになっていいる。上端の色つき布地はしばしばタンブラ刺繡（クサリ刺繡）で飾られている。型紙を使用してタンブラ刺繡をする。まず型紙を布地に縫いつけ、布地の裏側に糊を塗り、それから型紙にしたがって刺繡をする。

ハルハ・モンゴル男子の帽子は、フェルトのつばつきのものと庇つきのものがある。冬期にはマルガイ *малгай* という帽子をかぶるが、その断ち方は頭巾に似ている。帽子は羊、キツネ、その他の毛皮で縫われ、上からラシャその他の材料でおおわれる。

男子は今では整髪したり、剃ったりしている。以前、ラマにならない男子 (*хар хүн*) は、頭の前半分だけを剃り、後頭部を弁髪にした [ラマは男女とも頭を全部丸めていた]。

子どもの衣服は、夏期は裕の小ハラート、冬は毛皮のシューバを用いる。小ハラートとシューバには帯を締める。小さな子どもは、衣服や帯に護符をつけていた。護符には衣服の肩や背に縫いつける小鈴、赤や黄のビーズ玉、貨幣などがある。一部の護符はずい分起源が古く、トーテミズムの残滓と結びついていると思われる。われわれはこの種の護符を、1948年アルハンガイ アイマクで見た。例えば、ルン ソモン出身の3歳の少女は帯に護符をつけていたが、その中には魚の脊椎、中国古銭3個、まるい小鈴、*бугу* の歯とひずめおよびニンクの球根入りの皮袋が入っていた。小ハラートの肩には赤いビーズ玉の糸のついた二つのテグ *тег* が縫いつけられていた。テグは赤と青の布で縫われた小さな三角形の枕状のもので、これを鎖のように連ねて用いた。ハルハ・モンゴルの説明によれば、テグは魚の鱗を示すという。ブグー *бугу* がかつて神聖な動物であり、魚はハルハ・モンゴルおよびオイラトが一度も食用としなかつたことを考慮に入れると、この子どもの護符と昔のトーテミズムとの関連を推定することも可能であろう。キツネの形をフェルトから切り抜いて子どもの揺籃に結びつけることも、こうした護符の一つである<sup>5</sup>。キツネやテグの形の同様な護符を、われわれは東部モンゴルでも、西部モンゴルのミンガト *мингат* でも見かけた。

ハルハ・モンゴルの狩猟服はふつうのものと変らない。ただしタルバガン（スルカ

5. 家族が子どもが死ぬと、生き残った子どもにつきのような仕度をさせた。すなわち、娘の場合には婦人服をつくり、頭頂を二つの編髪にした。そして衣服のホックは反対側、つまり右手の下ではなく、左手の下につけた。男の子の場合にも、上っ張りの襟をふつうとは反対にして着た。

сурка) 狼のときだけは例外である。この場合には、すでにのべたように、ハラートとズボンに白い皮のものでなければならぬ。このために、ときには羊皮の外套を、毛皮裏を表にくつがえし、頭には白いフェルトまたは毛皮の帽子をかぶる。この帽子には必ず、長くたれ下がる耳がついている。ハルハ・モンゴルの観念によれば、こうした衣服はオオカミまたはキツネを表わしているはずである。

狩猟服の帯には角でつくった火薬入れ (*хет*), *бугу* の角でつくった火薬をはかるもの (*цумик*) および弾丸を入れる皮袋 (*акшурак*) が結びつけられた。タルバガン狼にだけ特別な狩猟用服を着るのは、この動物に関連する古い伝統、おそらくはトーテム的性格の伝統と関連があると考えられる。例えば、バルガの多くのモンゴル人はタルバガン狼をせず、これをあえて殺した狼師を非難したことが知られている。ハルハ・モンゴルの場合は、この動物にねらいをつけた狼師は、はじめ許しをこう言葉をつぶやき、それから銃の引金を引いた<sup>6</sup>。

西部モンゴル (オイラト) の衣服を特徴づけるために、デルベトの衣服についてくわしくのべよう。というのは、彼らの衣服と頭飾は、若干の細かい特徴をのぞけば、他のオイラトの衣服に近いからである。

冬期、デルベトの男子は、羊皮の外套を着る。これはデウエル *девелъ* とよばれる。襟、前裾の縁は色の布地、多くの場合黒色の布地が縫いつけられる。縁飾りのないことは稀である。袖は縫いつけられない [別袖でない]。袖丈は手よりも約 20 cm 長い。襟の高さは 5~10 cm。外套は襟もと、右肩、腋下に 5~7 個のボタンでとめられる。外套は、これに帯をしめたとき、帯の上がゆったりとして、懐に多くの品物を入れられるように縫う。

毛皮の外套を布地でおおったものは、ウス *усь*, またはウチ *уч* とよばれる。

ズボンは雌羊の毛皮でつくり、毛皮裏を裸の体にあてるように着る。一部のデルベトは毛皮外套の下に、裏側に毛皮をつけた短い上衣を着ている。これは *чедзлек* とよばれる。

夏期、男たちは袷仕立てのハラート (*лавшиг*) を着る。この裁断法は毛皮外套の場

6. G. ポターニンは、タルバガンに関するつぎのような興味深い伝説を採録している。モンゴルの部族の住地に、彼らと親近関係にある戦闘的な部族が住んでいた。いかなる動物も彼らから逃れることができなかった。そこで動物たちは神に訴えた。そこで神はツバメに命じて、その部族の族長と試合をさせることにした。族長は1発の矢で飛んでいるツバメを射ち落さねばならなかった。もしこれに失敗すれば、その部族の狼師たちはまず親指を切断し、地下へ立ち去らねばならなかった。族長の矢はツバメの尾に命中し、ツバメはこれによって2羽に分かれたが、地上に落ちることはなかった。族長は自分の失敗を知り、親指を切断して地下に移り、タルバガンに変身した。彼の部族の人々も彼に従った」(G. ポターニン『西北モンゴル誌』)。類似した伝説はアヌーチン V. Anuchin も採録している。



合と同じである。ハラートの下にダレムバ（中国製の木綿）でつくったシャツ（*киллинг*）とズボンを着る。

女性は冬期、裸皮〔外側のおおいのない〕の雌羊皮の外套 *девели* および外側におおいのあるウス *усь* (*уч*) を着る。その裁断法は男性のものとは著しく異なっている。

女性の夏期用の衣服テルリグ *терлиг* は袷仕立てである。ウエストより少し上の部分に、ひだをとった広いスカートを縫いつけている。袖は広く長い。袖口には折返し（*нудрум*）といい、掌側が舌状に長くなっている）がついている。ボタンは右身頃につけられている。あきは、前中心の襟もとからはじまり、真直ぐに胸の中央に至り、そこから、右袖付の下端または少し上部にきて、さらに脇線にそって裾まであける。縁はウエストまで、錦または色つきの布地でふちどられ、裾も同様に広い縁飾りがつけられている。襟には白い肩かけ（*чаган драхо*）が縫いつけられている。胸の飾りはチムキヤル *чимкьяр* とよばれる。冬用の毛皮外套も同じ裁断法である。

すべての女性はシュエバとテルリグの上に、袖なしツェゲデク（*чегедек*）を着る。ツェゲデクはチョッキにひだつきのスカートが縫いつけられている。スカートの背中心は、ウエストまでスリットがあけてある。下に着ているテルリクの胸の刺繍が見えるように、ツェゲデクの前明きはひらいて着用している。ツェゲデクの胸の部分は、テルリクと同様に、錦や多彩色の刺繍をした布をつけている。

髪は左右に分けてとかし、三つ編み髪に結う。その両端末には銀の飾板（*тухук*, *тукук*）が1個ずつ結びつけられる。

三つ編み髪をビロードまたは布製の細長い袋に収める。この袋に飾板を縫いつける。この髪袋はウスニ・ゲル *усни герь*（文字通りには髪に住居の意）とよばれる。三つ編み髪は胸におろされ、その端末はワンピースの脇に結びつけられる<sup>7</sup>。

少女たちは冬期、大部分、縁どりで飾られた雌羊皮のシュエバ〔毛皮外套〕を着る。夏には軽いハラート（*хуца*）を着る。デルベットの少女たちの衣服は、袖口の折り返しをつけない点をのぞけば、男性用の裁断法と同じである。娘たちは、既婚女性とはちがって、男性と同じように帯を結ぶ。髪は1本だけ三つ編み髪にしてたらず。肌につけるシャツの形は、男性も既婚女性も、また娘たちも皆同じである。それは襟が小さく、右脇の上部をホックでとめる。また同じように、みんなが同じ裁断の兜形の帽子（*юдинг* および *дуулга*, *дуулха*）をかぶる。このほかに、中国風のまるい帽子

7. デルベットの俗信によれば、ユルタの中に入ってきた男性が、髪を梳いたり洗ったりしているのを見たときには、右手で自分の頭の半分にさわらねばならない。これは彼の希望がかなうことのしるしである。そして彼は、その女性が頭髪の残りの半分を抜き終るまで、そこから出てはならないことになっている。

(*торюоз*) およびロシア風のフェルト帽をかぶる。冬の帽子はキツネや仔羊の毛皮でつくる。夏用のものは布地につくられるが、ユディングの方は必ず赤い布地で縫われる。赤色はデルベトの部族の特色である。ユディングはロシアのバシュリク *башлык* [帽子の上にかぶる防寒用の頭巾] のようで、縁を上方に折り返している。これはステッチ模様で飾られている。後方にはテセム [後姿をひき立てるためのリボン] が結びつけられている。

長靴は、ハルハのものとはちがって、前革がなく、後方と前方から縫い合わされる二部分から裁たれている。フェルトの靴底の下に革を縫いつけ、つま先はひどく上方に曲がっている。フェルトの靴下の上にこの長靴をはく。靴下の上端は糸で刺繍され、長靴の胴の上に見える。

既婚女性も娘たちも耳飾、指輪、腕輪をつける。ワンピースの脇にはハンカチと長持の鍵をつけている。

男たちは帯の後側(右脇近く)に鞘をおさめたナイフと燧石、タバコと煙管を結びつけている。

ここでは、西部モンゴルの別の代表者であるオイラトの衣服について、ふれたいと思う。それは、デルベトと似ているからである。

われわれの集めた資料はモンゴルの諸部族、諸民族の歴史にとって、興味深いデー



写真12 ウズムチンの女性たち(右端はウズムチンの帽子をかぶったブリヤト女性)



写真13 ハルハの女性たち（都会の住民）



写真14 むかしのハルハ女性の衣服

タを提供している。多くの探検家たち（プルジュワルスキー、ポターニン、コズロフその他）は、モンゴルの衣服、とりわけ女性の衣服は個々の部族を区別する特徴となっていることを指摘している。しかし彼らは一般的な記述をするにとどまり、衣服と髪形の諸要素に十分な注意を払わなかった。この問題をくわしく検討してみよう。一見、諸部族や諸民族によって異なるとみられる女性のかぶりものについて見てみよう。それは髪形と装飾のコンビネーションからなっている。ハルハ・モンゴル、ミンガトおよびダリガングの女性では、こめかみの位置より翼状に広



図7 元朝の王妃の頭飾

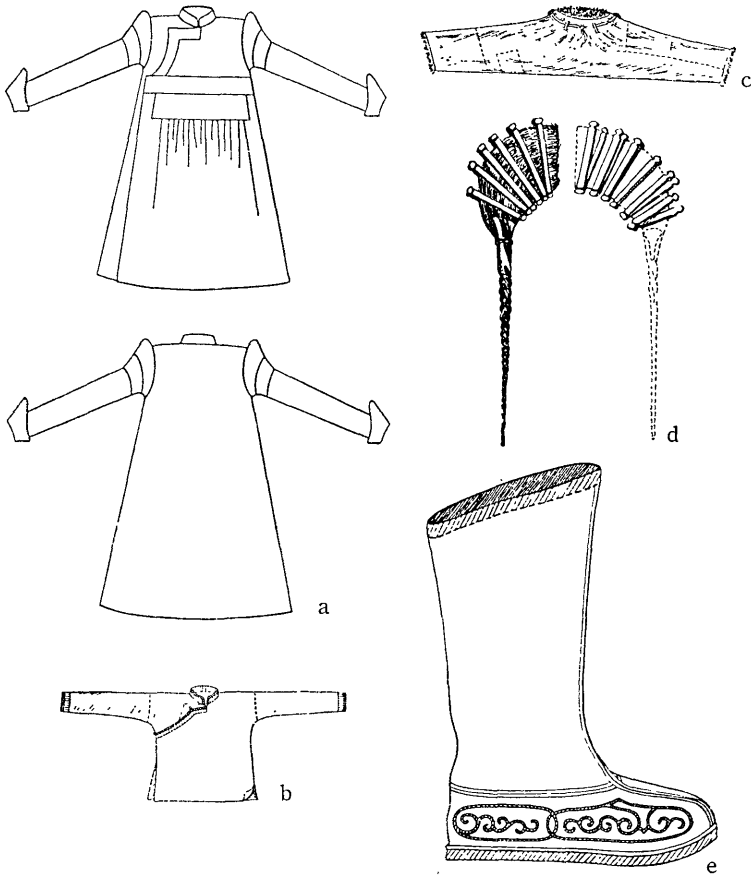


図8 モンゴルの衣服

- a—古いハルハ婦人服の断ち方 b—男性用シャツ  
 c—男性用の羊皮ズボン d—ハルハの既婚婦人の髪形のディテール  
 e—バルガ・ブリヤトの長靴

げられた2本の編み髪で、その上に、さまざまな下げ飾りをつけた冠をかぶった。バルガ・ブリヤトの場合も髪形は同じような形で、ただ冠の形がいくらかちがっていた。南部モンゴルのウズムチン、アバガ、トゥメト、オールドスその他の住民の場合には、翼はつくらず、三つ編み髪を2本に結び、その上に、冠のかわりに、サンゴや銀、あるいは金属製の小さな板をとりつけた鉢巻のようなものを結んだ。この鉢巻に、銀や金属製の様々な形の小板や、鎖にサンゴなどを組み合わせたものを吊り下げた。東部ブリヤト女性の場合には、編み髪の上の部分に、下げ飾りを固定するために特別の金属製心棒をさしこんだ。一部の女性は、南部モンゴルの鉢巻によく似た、編んだ鉢巻がみられた。デルベト、バイト、ザハチン、ホシュト、トルグトは、端末にさまざま

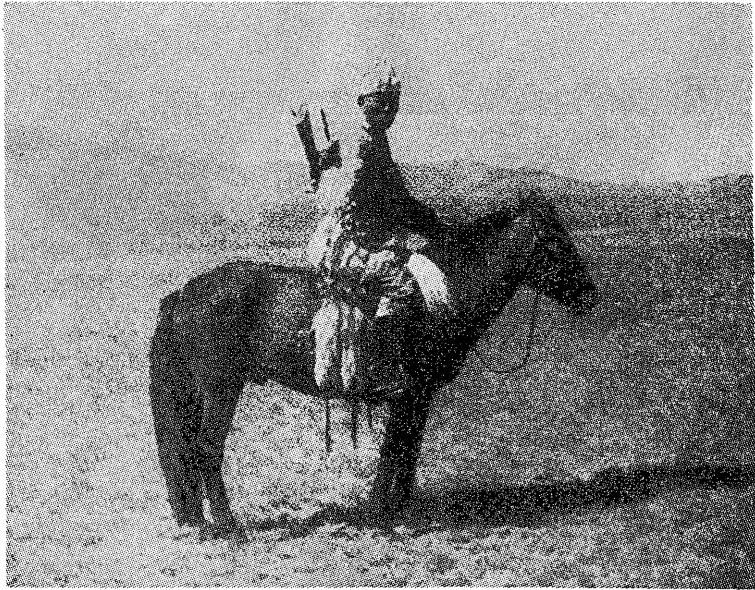


写真15 タルバガン 獵の 狩人

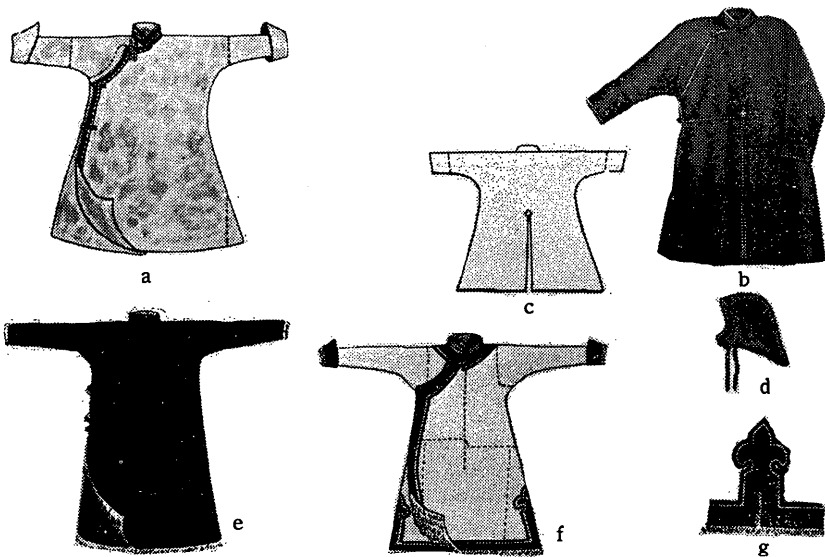


図9 モンゴルの衣服

- a—ハルハの娘の夏服 b—ハルハの雨外被の前面  
c—雨外被の後側 d—帽子 (ハルハ)  
e—ハルハの冬用ハラート f—白い羊皮製の外套 (バイト)  
g—外套の文様

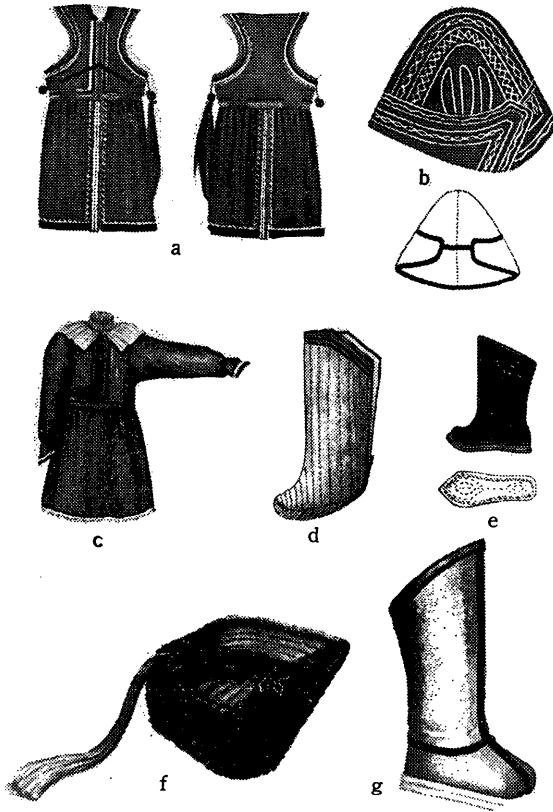


図10 モンゴルの衣服

a—デルベトの女性用ツェゲデク b—デルベトの帽子  
 c—デルベトの婦人服 d—靴下 e—ハルハの長靴  
 f—ウズムチンの女性の帽子 g—ウズムチンの長靴

な形の下げ飾りをつけた装飾された袋に2本の編み髪をおさめていた。彼女らは耳に、耳飾のかわりに、長い下げ飾りをつけた。これは鎖に銀か、金属製の飾板（持主の資力に応じて）を組み合わせていた。モンゴルのすべての女性は、ビロード、あるいは黒い布地で作った髪袋をつけていた。

このように、モンゴル女性の古い民族的な髪形では、必ず2本の編み（弁）髪に結われた。ハルハ、バルガ・ブリヤト、ダリガングなど一部では、編み髪の上部が広げられた。編み髪の上から冠または鉢巻がつけられ、そこから多くの下げ飾りがこめかみに下げられた。オイラトと東部ブリヤトの場合は、わりあい簡単な髪形をしていたが、現在も伝統的な、こめかみの下げ飾りは残っている。これらの髪形の上に必ず、帽子をかぶった。かぶりものと衣服を観察すると、材料の贅沢度と装飾の程度は西か

ら東への移動につれて、また持主の資力に応じて高まっていることが目についた。

最も堂々とした髪形（例えばハルハ・モンゴルその他）と高価な装飾は、衣服の場合も同じであるが、中国と隣接しているモンゴル人に多いという事実がこのことを物語っている。

ハルハ・モンゴルの女性の「翼」状の髪形は、一部の伝説では、モンゴル人の始祖とされる雄牛と結びつけられている。これに関連して、女性のかぶりものは、このことの想起に役立つはずだという。われわれの知っている歴史的遺物によれば、この種の髪形がそう古いものであるとは考えられない。13世紀のプラノ・カルピニとリュブリュキは、タタール人が頭上にポッカとよばれるたいへん高い頭飾をつけていたと述べている。ポッカの内側には髪が詰められていた。ポッカは樹皮でつくられ、絹地でおおわれ、クジャクの羽根と宝石によって飾られていた。

このことは、中国資料にも現われている。それは高さ3フィートに達する姑姑帽である。モンゴル・タタールの領主の妻たちは、このような帽子をかぶっていた。

元朝の26人の妃の肖像にみられる頭飾もこれに似たものと考えることができる。これは北京の王宮である紫禁城にあったもので、丈の高い頭飾と豊かなこめかみ飾りとが組み合わされている。

ビチューリン（イアキンフ）は烏桓についてつたえている。「烏桓はまるいユルタに住み、家畜とともに場所から場所へ移り、肉を食べ、クムイス〔乳酪〕を飲み、衣服はさまざまな色の織物からつくった。婦人は結婚のときに至って髪を蓄え、分けて髻（たぶさ）に結び、句決〔丈の高い冠帽〕をつけ、金や碧玉をつけて飾りとした。これはちょうど、中国の鬘かい〔婦人の首飾りの一種〕や步揺ほよう〔婦人の髪飾り〕のようなものである。」注の中でイアキンフは書いている。『統漢輿服志』につぎのように書かれている。諸公や重臣は絹の鉢巻をつけた。これは王妃の頭飾であるという。それには真珠の下げ飾りがつけられ、歩くと揺れた。」

イアキンフのこのデータはわれわれにとって、モンゴル女性の髪形と中国の髪形および古代における装飾との関連を示している点で興味深い。例えば、われわれがイスブラント・イデス（17世紀）やパラス（18世紀）の報告に見えるモンゴル女性の髪形と頭飾の記述や図像は、19世紀および20世紀のオイラトやブリヤトで見られるものと変らない。

以上の資料は、モンゴル女性の髪形はすべてのモンゴル部族や民族において同じであり、ちがうのはただ、冠または冠の代用となる鉢巻、こめかみの下げ飾りのつくり方のディテール、それに、いくつかの場合には、例えばハルハ・モンゴルの場合のよ

うに、弁髪（びんかみ）の編み方がちがうだけであることを示している。

女性の衣服についてみれば、その裁断法はすべてのモンゴル女性にほぼ共通している。相違点は、若干の部分の名称、形式のみである。例えば、袖なしは、ハルハ・モンゴルとブリヤトでウジ *уджи*、オイラトではツェゲデク *цегедек* とよばれる。ハルハ・モンゴルの場合、袖はさまざまな色の布切れから縫われ、高いふくらみがつけられている。ブリヤトの場合、ひだが多く、袖つけが広い。オイラトでは、同様に袖つけが広いが、しかしひだはない。オイラトの場合、襟に白い別衿をつけるが、他のモンゴルにはそれがない<sup>8</sup>。

男性の衣服の裁断法はモンゴルのすべての部族、民族に共通している。その特徴は右側でとめることである。というのは、左側の襟を右へ合わせるからであるが、これはリュブリュキの観察したチュルクとは異なっている。彼は、チュルクが「そのシャツを左側で結んでいる」とのべている。同様な風習はカザフのキレイ族にもみられる。しかしながら、チュルク諸族には、モンゴルにおけるような、衣服の一般的な裁断法はみられない。例えば、一部のオルホン川流域の石人には、モンゴル風の合わせ方が見られる [つまり、モンゴルは一樣であるが、チュルクの場合はいろいろちがっている]。

『唐書』には、「突厥（トグルク）は髪をばらばらにし、左を上にして着る」と書かれている。

モンゴルの男子服のディテールは、女性服の場合よりも変化が少ない。ここでもターミノロジーでは、若干の相違がある。例えば、ハルハ・モンゴルの夏服はデル *дэль*、オリョトではデウエル *дэвэль*、デルベトではラプシグ *лапшиг* とよばれる。これとちょうど同じように、履物は、ハルハではグタル *гумал*、デルベトではグスン *гусун*、オリョトではゴソ *госо* とよばれる。

衣服と髪形に関する以上の資料は、すべてのモンゴル部族、民族に共通する基盤のあることを示している。モンゴル国家の崩壊と、1368年（元朝の滅亡）以後の長期にわたる内紛、さらには西部モンゴルまたはオイラト、南部モンゴルの長期にわたる分離は、その文化の一部の側面、とりわけ物質文化に影響をあたえずにはおかなかった。この変化は以上のべた資料に現われているが、しかしそれは二次的な特徴に関するものにすぎなかったのである。

8. オイラトの女性の衣服は、アルタイおよびハカスのチュルク系住民の女性服に似ている。その類似は裁断だけでなく、その名称にもみられる。オイラトは袖なしをツェゲデクというが、アルタイではチェゲデクとよばれる。キリングとよばれるシャツはアルタイにもオイラトにもある。ハルハ・モンゴル、ブリヤトその他のモンゴル諸族では、シャツはツァムツとよばれる。



## 飲食物

モンゴルの農村住民の主要な食物は乳製品と肉であり、穀粉はわりあい少ない。

幾世紀にわたる牧畜はさまざまな種類の乳製品 (*цаган иде*) の開発をうながした。それは春と夏の搾乳ピーク時に利用されるだけでなく、搾乳の行なわれない冬期のためにも、いろいろな形で準備された。冬期における鮮乳の不足は肉および乾燥乳製品によって補われる。

モンゴル人は乳 (*сү*) を必ず沸かして飲む。乳をさまざまな方法で発酵させたり、蒸発させたりして数種類のチーズ (*бислаг*, *арул*, *эзгий*, *хурут*)、凝乳のたぐい (*тараг*, *айраг*) をつくる。飲物ではクミス (オイラトではチゲン *чигень*)、ハルハのグネ アイラグ *гүне айраг*、アルヒ *архи* など) がある。

最も好まれ、同時に最も尊重されるご馳走は乳の薄膜ウルム (*үрүм* または *өрмө*) である。これをつくるには、釜に鮮乳を入れ、とろ火で長時間沸かし、それが冷えた後、へら状のもので上層にできた厚い膜をていねいにすくいとり、広い皿または板の上に、多乳質の外皮の内側に脂質のクリーム状のものが入るようにして、二つに折りたたんだものである。この薄膜はいくらか乾燥させ、お茶に出される。残りの乳はわずかにあたためられ、容器にうつされ、酵母 (*хө рөнгө*) で発酵させると、凝乳 простокваша のたぐいであるタラグ *тараг* が得られる。これは夏期に多量に食べられている。オイラトの場合はアイラグ *айраг* がこれに相当するが、これはアルハト *архат* とよばれる大きな布袋に保存される。この容器に搾乳時間のちがう乳を満たし、それヒマル *химар* [水と牛乳をまぜてあたためたもの] をそいで発酵をはやめる。乳は一度ならず特別の攪拌棒 (*булур*) によってかきまぜられる。これによって脂肪分の細片が表面に集まり、容易に分離できるようになる。これを別の容器に集め、やがて加熱する。まれに、バターはスメタナ *сметана* またはスリフキ *сливки* [乳脂] を手でかきまぜ、泡だてて得られる。ひどく酸っぱいアイラグを碗に入れて飲む。アルヒ *архи* はこれからつくられる。

冬期用に残されたタラグやクミスのための酵母は、春に細かくされ、あたたかい乳の中に溶解される。古くからの慣習によると、モンゴル人は他人に酵母をあてえない。結婚した息子や娘たちはこれを両親の住居からもらうことができるが、その場合には酵母を受取るかわりに乳を持参しなければならなかった。

別の種類の乳製品としてはビスラグ *бислаг* [味のうすいチーズのたぐい] がある。これは大きな四角形のパンの形をしている。それをつくるには、煮たっている鮮乳の中にタラグまたはアイラグを入れる。すると乳は急速に凝結する。凝乳の塊を布製の

袋に入れ、プレスする。この目的のために、ふつう2枚の板が用いられる。よくプレスされたビスラグはたやすく薄片に切られ、茶といっしょに出される。ビスラグは夏期の食物である。これは、味はよいが、数日しか保存できない。アルル *Арул* も同じくチーズのたぐいである。この製法は2通りである。第一は、発酵した乳を沸かしたときに得られる凝乳塊である。第二は、発酵した乳をアルヒに蒸溜した後、底に残る凝乳状の沈澱物である。よく分離された凝乳は小さな塊で木の枠に入れ、日光で乾かす。夏期の晴れた日、モンゴルのユルタのそばを通ると、ユルタの円錐形の部分にのせて乾燥されているいくつかの木枠をいつでも見ることができる。いくつかの場合には、凝乳はプレスされ、薄片に切って糸を通し、同様に日に乾かす。この場合、それはフルト *хурум* またはフルサ *хурса* とよばれる<sup>6)</sup>。アルルとフルトは冬期用に大量に貯蔵される。

冬期のための貯蔵食としてエズギー *эзгий* がある。これをつくるには、ビスラグのときと同じように、沸かした鮮乳の中にタラグまたはアイラグを入れるが、ビスラグの場合とはちがって、凝乳の塊と乳漿(精) *сыворотки (шар ус)* とを分離せず、完全に蒸発するまで沸かしつづける。その結果、赤みがかったうす味の凝乳塊が得られる。これは長期の保存に堪えるものである。オイラト(バイト)の場合、エズギーをつくるとき、タラグの代わりに、酵母としてモロジヴォ *МОЛОЗИВО* [分娩前および分娩直後、乳腺から出る乳に似た液] が用いられる。

家内的な方法でつくられる乳製品として、煮沸したバター [シャル・トス] *(шар тос)* がある。すでにのべたように、皮袋 (*архам*) にそそがれた塩気のない乳をかきまぜるとき、表面に浮く脂を別の容器に集め、集まったところで溶かしなおし、よく洗った羊の胃袋または太い腸につめる。バターのこうした貯蔵法は遊牧生活によったものである。移牧にあっては道具がポータブルで、軽快、頑丈であることはたいへん重要である。上記のバター容器はこの要求に合致している。

モンゴル人民共和国では現在、国営の機械化されたバター工場があり、アラトはこ

6) 梅棹忠夫は内モンゴルの発音にしたがって「ホロート」と表記し、チーズの一種であるとのべている [梅棹 1955b: 233]。ここでアルルといい、フルトといい、いずれも発酵作用をうけた乳を材料にしていることは、本論文も梅棹もともに指摘している。梅棹はウルムについてのべたところで、ウルムは、「しぼった乳をすぐに加熱して処理する」もので、「発酵過程が進行していないということである」。これにたいし、フルトは「出発点から発酵作用をうけて」いる [梅棹 1955b: 247]。この点、江上波夫はやや単純化して記述している。「乳製品は主に羊・山羊の乳を用ひ、之を大鍋に入れて煮沸した後、木桶に移して冷却しながら静かに放置すると脂肪分は表面に浮んで凝固し、その他は下に沈澱する。その上層脂肪分よりなるものが即ち**チヂ**皮子であり、下層に沈澱したものを乾燥させたものが**チヂ餅子**である」 [江上編 1941: 289]。

れに乳を提供している。しかし工場へ納められるのは牛乳だけで、羊とヤギの乳は家内で加工されている。

クミスおよびウォッカも乳から家内的方法でつくられる飲物に属する。

クミスは、ハルハ・モンゴルでグネ アイラグ *гүне айраг*、オイラトではチゲン *чигень* またはチゲ *чиге* とよばれるが、夏期雌馬、まれに雌ラクダの乳からつくられる。ふつう、乳は大きな皮袋 (*архат*) にそそがれ、アイラグが酵母として用いられる。良質のクミスを得るにはしばしば攪拌する必要がある。とくに最初の1昼夜がそうで、攪拌棒で朝、昼、晩に少なくとも1時間かきまぜる。

モンゴル人は13世紀にこの飲物をよく知っていた。『モンゴル秘史』に示すように、テムジン(成吉思汗)は追手からのがれて、夜間、彼の保護者であるソルガン・シルのユルタを、馬乳をかきまぜる攪拌棒の音によって知ることができた。

クミスの攪拌についてのこの記述によって、その製法が今も変わっていないことを示している。

クミスはモンゴル人が大切にし、またたいへん好む飲物である。夏期、大人も子どももこれを飲み、客にご馳走し、ナダン祭り *надан* のために大量に用意する。ウルゲルチ *ульгерчи* (語り手) はクミスの酒杯を手にして、幸せを願い、傑出した人物や出来事をたたえて歌をうたう。ユルタの中で主人がクミスをご馳走するときには、クミスの最初の碗は最も尊敬すべき人、すなわちお客および年長者にあたえられる。この場合エチケットとして、渡す人も受取る人もつねに両手を使う。古くからのしきたりとして、モンゴル人はあたえられた碗を底まで飲みほさないのは失礼とされている。どうしても飲めないときには、液体に口びるをつけた後、主人または別の人に碗を渡す。ハルハの場合、クミスを飲む碗 (*бутэ*) をお茶に使うことはできない。モンゴルの老人の話によれば、こうすると馬乳がうすくなり、使いものにならなくなるという。モンゴル人がとくに馬を尊敬することを考慮に入れると、馬、とりわけクミスにともなう風習は、おそらくは原始共同体的な関係に結びつく古い伝統の痕跡をとどめていると考えられる。この証拠として、著者がモンゴル人の間で観察したつぎのような風習がある。すなわち、碗は出席者全員にまわされ、各人がそれを少しづつ飲んだのである。これは全出席者が同じ権利をもって飲酒に参加していることを示している。ポタポフ *Л. П. Потапов* は南アルタイ人の間で、クミスでなくて葡萄酒をまわし飲みするのを見たことを報告している。

任意の発酵乳でつくられる乳製ウォッカ (*архи*) も古来の飲物の一つである。ポタポフが強調しているように、牛の飼育によって乳製ウォッカの普及がうながされ、モ

ンゴル人民共和国およびブリヤト自治共和国のブリヤト人に見られるように、一部の遊牧民の間でクムイスが排除されるようになったのかも知れない。

ハルハ・モンゴルの場合、アルヒ *архи* はつぎのようにつくられる。炉にかけられたまるい釜 (*того*) に発酵した乳をそそぐ。釜の上から、先端を切断した円錐形の背の高い木器 (*бүрхэр*) をかぶせる。この容器の中に、2本の縄で小さな木桶をつらし、その縄は容器の外側に出して、上から蓋にもなるように、まるい小釜 (*джоловча*) をおしつける。円錐形の木器 (*бүрхэр*) と上の小釜 (*джоловча*) の接触する部分にはフェルト切れまたはぼろ切れ (*оролът*) をつめる。蓋代わりの容器に冷い水をそそぐ。下の釜を沸とうさせると、アルコールを含んだ水分が蒸発して上の釜の底にあたって冷却し、中につり下げられた小桶にたまるのである。

西部のモンゴル (オイラト) の場合には、蒸溜装置の構造は、ハルハとは若干異なっている。ここでは、ウオッカは外側にある壺に集められる。この目的のために二つの方法がある。第一の方法ではハルハの場合と似ており、ちがう点は、ブルヘル *бүрхэр* の中にある小桶の代わりに、木製シリンドーの中央から樋 (*чорго*) がひかれ、その一端は壺に入り、ブルヘル内にある他の一端はシャベル状になっている。上の釜 (*жоловча*) の底で冷却したアルコールの蒸気は酒の滴に化してシャベル上に落ち、樋をつたって壺に流れこむ。

まれには、この装置の第二のバリエーションがみられる。これは、上に蓋代用の釜のついた木製シリンドーの代わりに、二つの穴のある木製の半球形の覆いをかぶせたものである。その穴の一つにはV字形の木製管 (*чорго*) の一端がさしこまれ、別の一端は冷水の中に入れられた容器につながっている。第二の小さな穴を通じて蒸溜の過程がわかるようになっている。乳を沸とうさせると、蒸気は管を通して冷水中にある壺その他の容器に入り、そこで冷却される。

この最後のアルヒ製法はブリヤトのものによく似ている。アルヒはあたためて飲む。また、クムイスを飲むときと同じように、アルヒもまわし飲みされる。

モンゴル人は肉 (*махан*) を、主として煮て食べる。細かく切られた肉は大きな釜で水煮され、わずかに塩味がつけられる。全く塩を入れないことの方が多い。煮たあとの肉汁の中に穀物を入れるが、これにはコムギ (*шар буда*) または米 (*цаган буда*) が用いられる。モンゴル人はまた肉汁の中に中国風の麵 (*гоймон*) またはそうめんを入れたものを好む。煮あげた肉は碗にうつして食べ (ときには塩水につけて)、それから肉汁を飲む。

最も好まれ、尊重され、広く用いられる肉は羊である<sup>7)</sup>。羊を家内で屠殺するには

伝統的な方法が守られる。そのうち最も重要なものはつぎの通り。すなわち、第一には血が1滴も地上に落ちないようにする。第二に、肉は関節ごとにはらされるべきで、骨を細かく切ってはならない。昔は、羊はフェルトの上で屠殺された。今では、古来の屠殺法は羊やヤギなど小動物にのみ適用されているが、昔は大きな動物の場合も同じであった。とりわけ、その動物が犠牲として献げられる場合がそうであった。羊を地上に仰向けにさせ、胸骨の下の腹を切る。それから手を切口からさしこみ、拳で横隔膜をうち破り、大動脈を締めつける<sup>7)</sup>。羊の死後、皮を剥ぎはじめる。はじめ、前脚の中央部から胸を通るように皮に切れ目を入れ、ついで胸骨のまわりに二つの切れ目をつくり、やがて腹に沿って皮を切った後、後脚の半分のところまで切って毛皮を剥ぎとる。内臓をとりのぞいた後、屍体の中にたまった血は桶にうつされる。屠殺された動物の血と腸(зэдэс)は自家製のソーセージに利用される。この目的をもって、血の中にいくらかの穀粉が加えられる。ソーセージは肉といっしょに煮られる。

古い風習によれば、横隔膜つきの胸骨は、使用されるまで扉の近くのユルタの桁(унш)に結びつけ、ユルタ内につり下げておかねばならなかった。残りの肉は同じくユルタの扉の近くの格子につり下げた。モンゴル人は肝臓を羊の解体後直ちに食べることを好んだ。ふつうそれを、羊の胃から剥ぎとった脂肪層に巻いて、串に刺して焼く。毛皮とともに羊から分離される胸骨(кeрсeнь)の下部も同様に串で焼かれる。

羊の中で最も尊重される部分は頭部とウウツ ууц [尾のついた背中部分] (脊柱)である。昔はこれを神的なものや神聖な樹木に犠牲として献げたり、最も尊敬すべき人々にご馳走したりした。ふつうこれらの部分は大きな皿にもられたが、そのときウウツの上の羊頭はブルハン(仏像)または尊敬すべき人物の方に向けられた。最初に頭から切りとられた肉切れは、かつては、つねにブルハンに供えられた<sup>8)</sup>。

アラトは肉を食べるときフォークを使わない。関節にしたがってはらされた肉つきの骨を左手で持ち、ナイフで少しずつ切りとる。ときには肉を切るとき、それを歯で固定することもある。

アラトは肉の食べ方、切り方に大きな意義をあたえている。伝統的な作法を守らな

7) 北方のブリヤトの場合は、カザフと同様に、馬肉が最高とされ、そのつぎが羊肉となっている [ミハイロフ 1972: 148]。

8) この方法はブリヤトの場合も同じである [ミハイロフ 1972: 148]。「心臓」をひと握りして殺すと書いている人もあるが、「大動脈」を締めつけるのが正しいようである。梅棹忠夫も口頭で同じことを語った。

9) 北方のブリヤトでも羊頭は最も尊重されるのは同じであった。羊頭は最も尊敬すべき客にあたえられ、つぎの客には肩胛骨、大腿骨、いちばん下の2本の肋骨、肩の骨があたえられた。最も近い親戚には心臓と大動脈をご馳走した。また親族や来客にたいするご馳走と考えられたものに、羊の胸骨、羊の薦骨、背骨、大腸があった [ミハイロフ 1972: 148]。

いものは軽蔑される。彼らは肉の食べ方によって自分たちの同族であるかどうかを知るのである。

若干の古来の風習と俗信を指摘しておこう。モンゴル人の生活において、古くから占いの骨であった羊の肩胛骨 *даг* は、他の骨と同じように口にくわえてはいけぬ。女性が肩胛骨についた肉を食べることを許されるのは、それを男の手から受けるときだけである。古い慣習によれば、男子は肩胛骨の肉を居合わせているすべての男たちと分けて食べねばならなかった。屍体の後側の部分は女性の食物と考えられている。以前、モンゴル人は焼け石を動物の中に入れてむしあげた肉を食べた。この料理法は、ハルハではボトグ *ботог*、オイラトではズム *зум* とよばれた。今ではときおり、タルバガンの肉の料理にこの方法が適用されている。老人たちの思い出によれば、昔の獵師たちは、殺された動物の皮の中に焼け石と肉を入れて煮て食べたという。そのために剝がした動物の皮に水を入れ、その水がこぼれないように皮を樹木にかけ、その水の中に焼け石と肉を入れたのである。

夏、肉が長い間保存できないときには、それを野天干しにしたり、乾燥させたりする。それを袋に入れておくと、長持ちする。

赤んぼうには、羊尾〔脂肪のついた〕(*ураг-баиты*) を煮てあたえる。

すでに指摘したように、モンゴル人は穀粉よりも、肉と乳製品の方を多く食べる。今では都会や地方の中心地にパン焼窯があり、発酵させたパン *талха* をつくっているが、フドン（農村）では今なお、塩気のないねり粉を利用した古い料理法が残っている。粉を利用した食品のうち、とくによく普及しているのはボルツォグ *борцог* である。これはウクライナのガルシェク *галушек* と同じように、ねり粉を細かく切り、羊の脂肪またはバターとともに煮こんだものである。同じような方法で塩味のない焼菓子その他を焼く（正しくは煮る）。ときにはこのために、彫刻文様のある細長い型付板の用いられることもある。

尊重される食物の一つとしてハルマグ *хальмаг* がある。これをつくるには、予め乳の薄膜 *өрмө* を沸とうによってつくり、これに穀粉をふりかけ、その混じったものを焼きあげる。よく広まっている粉食品としてオオムギのひき粉がある。これは家の中だけでなく、保存食として獵師、キャラバンの案内人、牧夫らが携行するものである。二にぎりほどのひき粉があれば、朝食で満腹するのに充分である。鍋に水または茶を沸かし、その中にバターを溶かし、ひき粉を入れて濃いねり粉の状態にませ、茶を飲みながら手で食べるのである。

中国料理の影響をうけて、モンゴルの人々のうちにも、生肉をつめた肉まんじゅう

が広まっている。その一つはフシユル *хушуры* で、塩気のないねり粉でつくり、まるいものをバターで揚げるのである。もう一つの種類であるブーズ *бууз* は、蒸してつくり、味はシベリアのぎょうぎ *пельмень* に似ている。それをつくるには、棒をころがしてうすくのばしたまるいねり粉に肉をのせ、端を横に合わすことなく、ロゼットカ〔円環飾〕状に集め、そこを手でつまんで、沸とうしている釜の中の格子上にのせる。この場合格子の上端が湯につからないようにする。釜の上から蓋をかぶせる。

モンゴル人は商店 *магазин* でロシアや中国の甘い焼菓子 (*бооб*)、さらには砂糖や菓子を入手している。

茶はレンガ状に蒸し固めたものが好まれる。中国製が多い〔今はグルジア製が多い〕。これを濃く煮て、乳、バター(または脂肪) および塩 (*хүджир*) で味をつける。茶は1日じゅう飲む。ユルタに来客があったときには、なによりもまず碗にいっぱいの茶をすすめる。

モンゴル人の生活では、茶の代用になる野草は古くから知られていた。植物学者ユナトフ *А. А. Юнатов* の研究によれば、茶の代用として利用される現地植物は30種以上知られているが、そのうち主なものはつぎの通り。すなわち、葉の長いアカバナ、ヤナギラン (*Chamaenerion angustifolium*)、ゲンノショウコ (*Geranium pseudosibiricum*, *G. pratense*)、ノバラ (*Rosa acicularis*)、チシマチャ (*Potentilla fruticosa*)、シャクヤク (*Paeonia hybrida*, *P. albiflora*) などである。

終りに食物に関するデルベトの古い俗信と儀礼をいくつか紹介しよう。これはわれわれが老人たちからきいたものである。

釜の中でなにか煮物をしているときに、ユルタの中に居あわせるか、あるいは入ってきた人は、必ず煮上るまで待ってその味をみななければならない。それができないときには、ユルタを出るとき右手で釜にさわると、さらに自分の左肩にふれて、いかにも食べたいような素ぶりを見せることになっている。



写真16 木臼で穀物を搗く

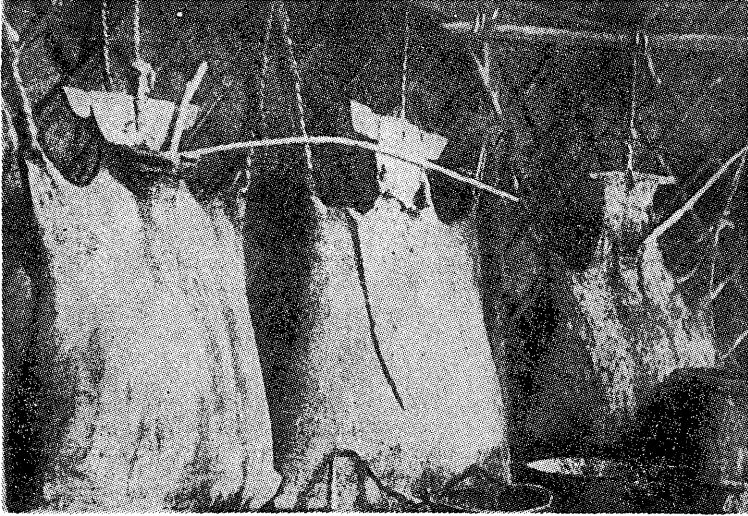


写真17 クミス用の皮袋

もしもデルベトが誰かに穀物、粉あるいは液状の食物をあたえるときには、自分の持っている「幸せ」をのがさないために、少量の液体または粉や穀物を手許に残した。春の最初の雷が鳴ったときには、ユルタを3回まわり、乳やクミスなど乳製品をユルタにふりかける人もいた。

またかつては、ご馳走を用意したとき、その最初の部分 (*деджи*) を食事の間じゅうブルハンの前に供え、食事が終るとそれを片づけた。その場合、供えたものが肉であればそれを食べ、それがお茶であれば、その数滴を火にふりかけ、残りを外に捨てながら「ソク、ソク」と言った。お茶は供物とせず、飲みはじめる前にその数滴を煙出しの穴 [ユルタの] からふりかけ、残りを外に捨てた。

かつては、「火の崇敬」 (*гал таалга*) の儀礼を行なうとき、ユルタの右側、扉のところに穴をつくり、そこから茶を3度投げた。その場合、茶が煙出し穴から落ちて、炉のところで肉 (*далгна*) を持って坐っている人にふりかけるようにした。この儀礼を行なうとき、子どもたちは、その肉 (*цаган маха*) から1切れほど肉を食いちぎることになっていた。

夜間にかを食えるとき、床の上に食物 (肉、パンなど) の1片が落ちたときには、これを必ず拾いあげて食べた。反対に、それが昼であれば、拾いあげることも、食べることもしなかった。デルベトこれをつぎのように説明した。夜の場合には、ブルハンが食物の落ちるのを助けるのにたいし、昼の場合は悪い霊がそれを助けている。

モンゴルの遊牧民たちは、植物性の食物の一部として野生の植物を食べた。われわ



れのもっているデータは極めて不十分である。わずかにズプハン アイマクとゴビ地方の一部に関するものだけである。

主として南ゴビ地方の流砂地域ではスルヒル *сульхир* またはスルク *сулькур* (*Agriophyllum gobicum*) の種子を採集している。植物の茎は高さ 60 cm に達し、根とともに掘りおこされる。種子は黄褐色でコムギに似ており、棒でたたき落とし、袋の中に入れる。必要に応じてスルヒルをあぶって、ひき臼で細かくひきつぶす。こうして得た粉・ひき割りに脂肪またはバターをまぜ、お茶といっしょに食べる。

スルヒルの採集は 9-10月に行なわれ、1 家族平均 160 kg に達している。

ウリヤスタイの西方および南方の砂漠の中ではハル・スル *хар-сульт* (*Ammophila (Psamma) Villosa*) を採集している。8月に熟する黒みがかかったスミレ色の種子の採集には、穂だけを切りとり、茎はその場に残される。脱穀して、スルヒルと同じようにして食物に用いられる。

ウリヤスタイ市の北方および北東方の高山性牧草地では、ネズミの穴からミャキル *мякир* またはメヘル *мэхэр Persicaria viviparum*) を掘り出している。集めた植物は予めきれいにし、あぶってからひき臼にかけて手で粉にする。ときにはこれを肉といっしょに煮ることもある。ミャキルの採集は 8月に行なわれる。1 家族で 150~200 kg を集めることができる。

ウリヤスタイの北方および北東方の森林地域ではユリの球根 *төмөс (Lilium martagon)* を掘っている。この球根を乳に入れて煮る。冷えた後、乳の薄膜とともに動物の胃袋からつくった容器に入れ、冬期用の保存食とする。*төмөс* はふつう 6月に採集される。

ウリヤスタイ地方では、5月に、森林中の草原でカンディク (*кичигин*) (野生スミレの一種) を掘っている。これを乳で煮たり、肉汁で味つけしたりする。

この地域の森林中の草原ではボルゴン *бөргөн* を採集している。この植物のロシア名を確定することはできなかった。記述によると、その総状花は円錐花序の形をしており、茎の高さは 25 cm に達する。その種子をまず乾燥し、手で押しつぶし、さやをとり去り、乳または肉汁の中で煮る。

この植物を凝乳とまぜて、冬期用に保存するが、お茶を煮るときの味付として好適である。

ヤマン・ハング *яман-ханг* という名称で知られるモンゴルの植物のロシア名もよくわからない。これは山の断崖に生えるもので、長さ 10 cm、太さ 1 cm の根が食用になる。ヤマン・ハングは 4月に掘り、肉または乳といっしょに煮る。冬期用とし

ては乾燥させる。

豊作のときには、1家族で30ないし50kgを採集することができる。

## 文 献

Вайнштейн С. И. (ワインシュテイン)

- 1973 *Проблема происхождения и формирования хозяйственно-культурного типа кочевых скотоводов умеренного пояса Евразии.*— IX МКАЭН. Доклады советской делегации. М.

江上波夫編

- 1941 『蒙古高原横断記』 日光書院。

Грайворонский, В.В. (グライヴォロンスキー)

- 1979 *От кочевого образа жизни к оседлости* (на опыте М.Н.Р), Москва.

Ланг, Л. (ラング)

- 1978 *Записки Л. Ланга в поездке в Пекин в 1715–1717*, В кн. *Русско-Китайские отношения в XVIII веке. Материалы и документы*, том 1, Москва.

Михайлов, Т.М.и другие (ミハイロフ)

- 1972 *Очерки истории культуры Бурятии*, том 1, Улан-удэ.

Саввин, В.П. (サヴィン)

- 1940 *Взаимоотношения царской России и СССР с Китаем*. М.-Л.

Шлендаб, В

- 1977 『資本主義を飛び越えて』 松田忠徳訳 シルクロード社。

梅棹忠夫

- 1950 「乳をめぐるモンゴルの生態 (I)」 『自然と文化』 1: 187~214。

- 1951 「乳をめぐるモンゴルの生態 (II)」 『自然と文化』 2: 119~172。

- 1955a 「草刈るモンゴル」 ユーラシア学会編 『遊牧民族の研究—ユーラシア学会研究報告』 自然史学会, pp. 13~99。

- 1955b 「モンゴルの乳製品とその製造法—乳をめぐるモンゴルの生態 III」 ユーラシア学会編 『内陸アジアの研究—ヘディン博士記念号—ユーラシア学会研究報告 III』 自然史学会, pp. 217~296。

吉田 実

- 1979 『モンゴル発見』 青林書院新社。